

ソウル・ザ・ペアレンツ

水谷健吾

【登場人物】

斎藤瑠璃(27) 慎吾と婚約中

長島慎吾(29) 瑠璃と婚約中

斎藤葵(26) 瑠璃の弟。智大と魂が入れ替わる

斎藤智大(51) 瑠璃の父。葵と魂が入れ替わる

斎藤千代(45) 智大の妹。ルンバと魂が入れ替わる

斎藤美幸(25) 瑠璃の妹。熱帯魚と魂が入れ替わる

下井フミカ(49) お隣さん。瑠璃の母と魂が入れ替わる

下井啓介(27) フミカの息子。瑠璃に片思いしている

下井恵子(24) フミカの娘

長島雫(28) 慎吾の妹

長島駿(26) 慎吾の弟

片瀬真理恵(25) 千代の助手

【本編】

舞台は瑠璃の実家の居間で、前面が縁側になっている。

下手奥にはのれんがあり、玄関へとつながっている。上手には襖があり、隣の部屋につながっている。

中央奥にも両開きの襖があり、廊下につながっている。

居間の中央にはちやぶ台。

下手奥には棚、ゴミ箱があり、棚の上に水槽が置かれている。

上手の手前にはルンバ。

部屋の中には瑠璃の父親、智大がいる。腕にアップルウォッチをつけている。

瑠璃が母親と話している声が聞こえる。

瑠璃(声)「ん、なに？ 大丈夫。あとから連れてくるから。うん、はい」

瑠璃、上手から部屋に入ってくる。

瑠璃「ちよつと、着替えてよ」

智大「自分の家にいるんだ。普段通りで何が悪い」

瑠璃「服、逆だよ」

智大「あ」

智大、上着の表裏を直す。

瑠璃「つていうか、大丈夫なの？」

智大「家のことはなんとか。ほらその、ルンボ」

瑠璃「ルンバね」

智大「ルンバも買ったし」

瑠璃「それもなんだけど、お母さん。自力で起き上がれないみたいだし、言葉もうまく出てこないじゃん。前より悪くなっていない？」

智大「心配するな。こっちはこっちでなんとかやっているんだから。母さんも、ああ見えて中身は元気なんだよ。それに、何かあればこれに通知が来る

瑠璃「アップルウォッチ」

葵、下手から入ってくる。瑠璃に買ってもらった帽子をかぶっている。

葵「ただいまー!!」

瑠璃「おかえり」

葵「……来てる?」

瑠璃「まだ。でも、もうすぐだと思う」

葵「おおー。おおー!!」

智大「落ち着け」

葵「いや浮き足立つちやって。さっき気づいたんだけど、俺、(上着を)裏表に着てた」

智大「気をつけた方が良さな」

瑠璃「あ」

葵「さっそく付けてますよー。ありがとね、東京にしか売ってないらしくて」

瑠璃「全然」

葵「相手、慎吾さん、だっけ?」

瑠璃「そう。長島慎吾さん」

葵「写真とかないの?」

瑠璃「あるよー」

瑠璃、葵に写真を見せる。

葵「あらいケメン」

瑠璃「ふふー」

葵「え、ど」が好きなの?」

瑠璃「んー、やっぱり性格かなあ」

智大「出身は?」

瑠璃「向こうだけど」

智大「シティボーイか」

葵「東京に染まっている」

瑠璃「別にでしょ」

葵、中央襖からはける。

智大「夜遅くまで出歩いたりしてないだろうな? 今日もニュースでやってたぞ。若い男が、フラれた腹いせに元カノを殺したとか。東京はそんなんばっかだろ」

瑠璃「そんなことないって」

智大「みんな、覚せい剤やっているんだろ」

瑠璃「偏見持ちすぎ」

フミカ、庭からやってくる。おすそ分けを持ってくる。

フミカ「こんにちはー」

瑠璃「あ、こんにちは」

フミカ「これ、大したもんじゃないんですけどね、蜜柑たくさんもらっちゃって」

瑠璃「ありがとうございます」

葵、中央襖から戻ってくる。

智大「すいませんね、いつも」

フミカ「いーえー。あ、結婚のお祝いは、また持ってきますから」

智大「え？」

フミカ「瑠璃さん、結婚するんでしょう？」

智大「なぜそれを」

フミカ「さつき駅でね」

瑠璃「はい」

フミカ「もう最初会った時、誰だか分からなかったですよ。綺麗になっちゃって」

瑠璃「ええ、そうなんですー」

フミカ「結婚すること、ほぼほぼ決まりなんですよ？」

瑠璃「はい」

フミカ「おめでとっつございます」

瑠璃「ありがとうございます」

智大「まだわかりません!」

フミカ「あら。智大さんは反対？」

智大「今から初めて会いますから。まだなんとも」

フミカ「あらー」

葵「あれ？ ルンバ、紙詰まってるよ」

フミカ「あ、それ新しいやつですよね。AI搭載の」

葵「そうなんですよ」

千代、下手から登場。ヘルメットを首にかけ、白衣を身につけ、魂移転装置を持っている。

千代「おはようございマッカーサー!」

智大「もう昼の3時だ」

千代「科学的には今が朝なんだよ。瑠璃、久しぶり」

瑠璃「叔母さん、どっしたのー?」

千代「どうしたのじゃないよ。可愛い姪っ子が婚約者連れてくるんだから立ち会わないと」
瑠璃「えーそれでわざわざ？」

千代「おうよ」

瑠璃「嬉しいありがとう！（葵に）なんで教えたの？」

葵「こめん、ぽろつと」

智大「なんだこれ」

千代「ようやく完成したんだよ。瑠璃の婚約者が来たらお披露目する」

智大「どうせまたよくわからん失敗するんだろ」

千代「今度は大丈夫！」

智大「何を根拠に」

千代「兄さん。ギリシャの哲学者アリストレスはこう言った。『科学の源、それは直感』だと」

智大「勘はダメだろ」

千代「お、蜜柑じゃん、一個もーらいつー！」

智大「はあ」

美幸、中央襖からやってくる。

美幸「おはよー」

智大「昼の3時だ」

千代「美幸ちゃん。グッモーニングリコー！」

美幸「（葵に）なんでいんの？」

葵「姉ちゃんの婚約者に会いに」

瑠璃「よっ」

美幸「あー、今日だっけ」

瑠璃「そうそう」

美幸「……ウケる」

瑠璃「なにがだよ」

智大「美幸。お前、夜中にまた音楽流していただろ。あのキンキンうるさいの」

美幸「メタルロック」

智大「名前はいつでも良いんだよ。もっと静かに聞きなさい」

美幸「なんで？」

智大「なんでって？近所さんに迷惑だろ」

フミカ「ウチは全然」

美幸「父さんが嫌いなだけでしょ」

智大「父さんは別に良いんだよ」

美幸「今度貸してあげる」

智大「いらんわ」

瑠璃、慎吾から電話。

瑠璃「あ、もしもし」

美幸「誰！ マイケルの水槽、動かしたの、誰！」

葵「あ、俺だけど」

美幸「気をつけてよ、マイケルは夜行性なんだから」

瑠璃「あ、もう着く？ ちょっと待ってて！ 早く着替えてよ」

瑠璃、下手からはけていく。

フミカ「長生きですよ、マイケルちゃん」

智大「ほとんど瑠璃と同じ年です」

フミカ「わ、ギネス級」

美幸「謝って、今すぐマイケルに謝って！」

葵「マイケルに謝ってもわかんないでしょ」

美幸「わかるから、マイケル、超頭良いから！」

千代「すいません。一旦、動作確認しますー」

葵「動作確認？」

千代、レバーを動かすと、室内にいる全員の魂が抜け出る。

暗転。

明転。

瑠璃「あ、もうすぐバス停に着くってことね。はいはいー」

瑠璃、下手から戻ってくる。

瑠璃「え？ ええ！？」

フミカ「トミミ、起きる。」

フミカ「うーん」

瑠璃「だ、大丈夫ですか？」

フミカ「……瑠璃ちゃん？ 私動けてる、動けてるわ！ なにこれ、私の体じゃない！」

フミカ、棚に置かれた手鏡で自分の姿を確認。

フミカ「これ、お隣さんの体？」

瑠璃「フミカさん？」

フミカ「瑠璃ちゃん、私よ、私！ お母さん」

瑠璃「オカアサン？」

フミカ「そう！ マザー。アイアム、ユア、マザー！ ヒトミ！」

瑠璃「？」

フミカ「東浦小学校3年2組、石川優馬くん！」

瑠璃「！」

フミカ「転校しちゃう彼に瑠璃ちゃんは手紙を渡すことができなかった！」

瑠璃「なんでそれを」

フミカ「その木彫りのくまは美幸ちゃんが成人式の時に酔っ払ってどこからか拾ってきたやつ！

「この柱の傷はあおくんが部屋で素振りをした時にぶつけて出来たもの！」

フミカ、壁に飾られた絵を傾ける。

フミカ「そしてこの額縁はちょっと傾いている方が私の好み」

瑠璃「お母さん！？」

フミカ「そう！」

智大（葵）、葵（智大）、起きる。

智大「うーん」

葵「何が起きたんだ」

智・葵「……ん？」

智大「え、俺！？ 俺、ええええ！？」

葵「なんだこれは、どうなっているんだ！」

智大、葵、互いの顔を確認しながらパニックに。

フミカ、手鏡を葵に渡す。

智・葵「えー！」

智大、葵、さらにパニックに。

フミカ「お父さん」

葵「？」

フミカ「わかる、お父さん？」

フミカ、葵の手を握る。

葵「……ヒトミ？」

フミカ「あおくん」

智大「母さん？」

瑠璃「待つて待つて待つて。……葵？」

智大「はい」

瑠璃「お父さん？」

葵「ああ」

瑠璃「お母さん？」

フミカ「お母さんです」

瑠璃「どういこと？ え、どういこと！？」

智大「だから、千代叔母さんがこのレバーを動かしたら、地面が揺れたような感覚があつて、気づいたらこの状態、だよね？」

フミカ「つまり、魂が入れ替わったのよ」

智大「マジで！？」

瑠璃「いやいやどっという原理？」

フミカ、庭からハケる。

葵「待つてくれ、全然ついていけない」

智大「だから、俺と父さんが入れ替わつて、お隣さんの体の中に母さんの魂が入っているんだよ」

瑠璃「お母さんの体、確認してくる！」

瑠璃、上手からハケる。

葵「いやいや、そんなことがありえるのか」

智大「でも実際こは入れ替わってるじゃん！ っていうかさっき、父さんも母さんだつて気付いてたし」

葵「あれは、手を握ったらそんな気がしたっていうか」
智大「おお。愛だ」

フミカ、庭から戻ってくる。

フミカ「外で騒ぎが起きている気配はないし、範囲はここだけみたいね」
智大「っていうか、母さん大丈夫なの、体調？」

フミカ「ばつちり！ さっきまで全然体が動かなかったのに、今はもう、ほとぼしるエネルギーで溢れてる！」

葵「そこまでは若くないだろ」

フミカ「二人は？」

智大「俺は、なんとなくトイレに行きたい」
フミカ「頻尿ね」

瑠璃、上手から戻ってくる。

瑠璃「お母さんの体にお隣さん入ってた！」
智大「マジか！」

フミカ、上手からハケる。

瑠璃「ねえねえ！ ……」「こは？」

一同、美幸と千代を見る。

智大「このペアってことだよな？」
一同「……」

葵「起きないぞ」

瑠璃「……ミユ」

智大「いや」

瑠璃「……叔母、さーん？」

フミカ、上手から戻ってくる。

瑠璃、美幸に近づく。

美幸、ピチピチと跳ねる。

瑠璃「！」

美幸、ピチピチと跳ねる。

瑠璃「！？」

美幸、ピチピチと跳ねる。

智大「これは」

瑠璃「……マイケル？」

葵「マイケル。え、マイケル！？」

智大「熱帯魚と入れ替わったってこと！？」

一同、水槽を覗く。

瑠璃「じゃあじゃあ、これが美幸？」

智大「うわー」

フミカ「お母さんよ、あなたのマザーよ？」

葵「これは助け出したほうが良いのか？」

瑠璃「ああ、水の中だし！」

智大「でも体は熱帯魚なんだよね？ だからエラ呼吸はできているんじゃない？」

葵「そういうものなのか？」

フミカ「確かに気持ちよさそうに泳いでいるけど」

瑠璃「あー、確かに」

美幸、いつそう激しく跳ねる。

瑠璃「今度は何！？」

智大「怖え……」

葵「なにか、伝えたいことがあるんじゃないか？」

智大「光が嫌なんじゃない？ マイケル夜行性だから！」

フミカ「暗いところ、暗いところに移動させましょー！」

葵「とりあえずこっちは！」

葵と智大、美幸を中央襖の奥に入れる。

瑠璃「じゃあ、叔母さんは？」

フミカ「……入れ替わる相手がいないよね？」

一同「……」

瑠璃「叔母さーん？ 千代叔母さーん？」

千代、反応なし。

フミカ「ひょっとして、千代さんの魂だけ行き場がなくなって、今もこの辺をさまよってるのか！」

葵「なんだその展開」

智大「もはやホラーだよ」

瑠璃「でもそれってマズくない？ この機械のこと知ってるの、叔母さんだけなんですよ？」

一同「……」

智大「叔母さん！」

葵「お前、無責任すぎるぞ！ おい！」

葵、千代の頬を叩く。

千代、立ち上がると、機械的な動きで蜜柑の皮の上を行ったり来たりする。

瑠璃「……ルンバ？」

智大「ルンバ！？」

葵「ルンバって、これと入れ替わったってことか！？」

智大「熱帯魚はまだわかるけど、これはありなの？」

フミカ「あ、でも。長く使っていた物には魂が宿るっていうし」

瑠璃「あー、髪が伸びる人形とか？」

フミカ「そうそうそう」

葵「その延長にルンバはないだろ」

智大「っていうか買ったの先月だしね」

葵「愛着のかけらもない」

瑠璃「えーつまり、お隣さんとお母さんが入れ替わって、お父さんと葵が入れ替わって、美幸とマイケルが入れ替わって、千代叔母さんとルンバが入れ替わった」

智大「ヤベえ……」

玄関から慎吾の声が聞こえる。

慎吾(声)「ごめんくださいー」

瑠璃「慎吾だ」

フミカ「慎吾って、瑠璃ちゃんの婚約者！？」

瑠璃「うん」

葵「なんてタイミングだ」

智大「と、とにかく、いろいろ隠した方が良くない？」

瑠璃「ああ、そうだね。ここに案内するし」

葵「待て待て、この状態で会うのか？」

フミカ「うわあ、緊張してきた。え、どんな人なんだっけ？」

瑠璃「えつとね。付き合ったのは私が初めてらしくて――」

葵「そんな話をしてる場合か！　すぐに帰ってもらえ！」

瑠璃「なんで？」

葵「なんでってこんな状態で会える訳ないだろ」

瑠璃「でも東京から8時間もかけて来てくれたんだよ」

フミカ「私会ってみたい！」

葵「母さん」

フミカ「会ってみたいです！」

慎吾(声)「すいませーん」

智大「とりあえず、これ、これ持っていこ！」

智大とフミカ、魂移転装置を上手に持つてはける。

慎吾(声)「あのー、あのー」

瑠璃「あ、はいー！」

瑠璃、下手からはける。

葵「おい瑠璃」

千代「同期が完了しました。私は斎藤千代」

葵「……おい、なんか言ってるぞー！」

智大、上手からやってくる。

智大「叔母さん、こっちの部屋に！」

葵「喋ってた！　なんかいま喋ってた！」

智大と葵、千代を上手に連れていく。

瑠璃、居間を覗く。

瑠璃「……おっけい！」

瑠璃、慎吾を連れて下手からやってくる。

瑠璃「どうぞー」

慎吾「お邪魔します！」

瑠璃「あ、じゃあここに座ってもらって」

慎吾「あ、うん」

瑠璃「ちょっと待ってね」

瑠璃、中央の左襖を開けると跳ねている美幸がいる。

瑠璃「うおー！」

慎吾「？」

瑠璃「なんでもない。」「ゆっくり」

瑠璃、上手からハケる。

フミカ、中央右襖からやってくる。

フミカ「あ」

慎吾「あ、初めまして。自分、瑠璃さんとお付き合いしております。長島慎吾です」

フミカ「どうも」

慎吾「えっと」

フミカ「あ、母です」

慎吾「あ、やっぱり、いや、そうかなあとは思ったのですが、体調があまりよろしくないと聞いていたので」

フミカ「今日は、たまたま気分が良くて！ あ、どうぞ座って」

慎吾「失礼します。本日はお忙しい中、お時間を取っていただき、ありがとうございます」

フミカ「いえいえ。……カッコいいね」

慎吾「え」

フミカ「カッコいいでしょー、やー瑠璃ちゃんも隅に置けないわねえ。こんなカッコイイ婚約者連れてきて。ひゅーひゅーだぞー」

慎吾「あ、ありがとうございます」

フミカ「私ね、瑠璃ちゃんが結婚するのずっと楽しみにしていたのよ。私たちがちゃんとした式を挙げられていないっていうのもあって、だからあの子には、素敵な結婚式をしてほしいなって。瑠璃ちゃん、真つ白なウエディングドレス絶対に似合うと思うの。真つ赤なバージンロードの上を歩く瑠璃ちゃん、これすこい素敵だと思っの！ あ、もちろんもちろん二人が和装でやりたいならそれもアリだと思っのよ？ あの子着物もいけるから。和洋折衷の顔立ちしているから。まあだからそういう話は二人の希望を聞いた上で進めていきたいと思ってるし、もちろん慎吾さんのご両親も交えて細かいプランは、あ、ごめんなさい、今日初めて会ったばかりなのにペラペラと。……聞き上手ねえ！」

慎吾「ありがとうございます」

フミカ「お節介おばさんですいません」

慎吾「いえ。むしろ、瑠璃さんがちょっと羨ましくなりました。実は僕、幼い頃に母を亡くしてまして」

フミカ「そっだったの」

慎吾「母との記憶は、幼稚園の帰りにハグをしてもらったのが最後です」

フミカ、慎吾の隣に座り、手を広げる、

フミカ「はい」

慎吾「え」

フミカ「どっぞ」

瑠璃、上手から入ってくる。

瑠璃「あ、いた。ってなにやってんのー！」

慎吾「ああ、今ちようど——」

瑠璃「こちらお隣さんでー！」

慎吾「お隣さん？」

瑠璃「え？」

慎吾「お母さんじゃ」

フミカ「……隣の家の、お母さんです」

慎吾「あ、そうだったんですか！？ すいません。てっきり瑠璃のお母さんだと」

フミカ「違いますよー！ 隣に住む下井フミカです」

慎吾「ごめんなさい勘違いしていました。え、ではなぜここに」

瑠璃「私たち、家族同然っていうか家族ぐるみの付き合いで」

フミカ「そっそう、互いの家、自由に行き来しているっというー！」

慎吾「あー。じゃあ、瑠璃ちゃんは真つ白なウエディングドレスが似合うって言っただのは」

フミカ「いちお隣さんとしての意見です」

瑠璃「いろんな人の結婚式に、口を出している人」

フミカ「それを生きがいやらせてもらってます」

慎吾「ああ……」

瑠璃「フミカさん、ちょっと良い？」

瑠璃、フミカを上手前に呼ぶ。

瑠璃「なんでお母さんって名乗っちゃったの？」

フミカ「ついとっさ」

瑠璃「とりあえず、このままお隣さんってことで押し通すから」

フミカ「え、それ大丈夫？」

瑠璃「来てくれているんだし、しょうがないでしょ」

フミカ「いつそ、全部バラしちゃえば？」

瑠璃「……無理！」

フミカ「なんで？」

瑠璃「だって変じゃん」

フミカ「変だとダメなの？」

瑠璃「ダメっていうか、慎吾その、いわゆる箱入り息子で」

フミカ「もしかして良いトコの坊ちゃん？」

瑠璃「まあ」

フミカ「玉の輿？」

瑠璃「それなりに」

フミカ「ふぉー！」

瑠璃「テンションあがらないで！とにかく、わかるでしょ？ただでさえ緊張しているのに、こんなわけのわからない状況だと知ったら慎吾パニックしちゃうよ。良い？ 慎吾には、魂が入れ替わったことは隠し切る方向で」

フミカ「わかった」

葵、上手から入ってくる。

葵「君が慎吾くんか」

慎吾「あ、はい。えっと——」

瑠璃「弟です」

慎吾「初めまして、長島慎吾です。よろしくお願いします」

葵「立ち上がるくらいしたらどうだ」

慎吾「あ、すみません」

慎吾、立つ。

葵「座りなさい」

葵、慎吾、座る。

瑠璃、フミカ、座る。

葵「君は瑠璃と真剣に付き合っているのか？」

慎吾「あ、はい。お姉さんとは真面目に交際をしています」

葵「いつからだ」

慎吾「半年ほど前から」

葵「半年？」

慎吾「はい」

葵「それは短いだろ」

慎吾「そう思われるのも「もったもなのですが——」

葵「短いな。短すぎる」

瑠璃「今の若い人たちはこれくらいだつて。まああんたも若いけど」

葵「短いな。三軒隣の吉井さんとの長男。彼は15年付き合った彼女と結婚していた」

瑠璃「それは長すぎでしょ」

フミカ「しかも先月、離婚したの」

瑠璃「ダメじゃん」

葵「だからもつと時間をかけるべきじゃなかった」

瑠璃「それはもう別の要因だよ。っていうか半年で婚約って東京じゃ珍しくないから」

葵「……やっぱり東京に染まってるじゃないか！」

瑠璃「染まってないって」

葵「やはり上京させるべきじゃなかった」

慎吾「申し訳ありません。ただ、これには理由がありまして」

葵「聞く必要はない。帰ってくれ！」

慎吾「ですが、せめてお義父さんと——」

葵「君にお父さんと呼ばれる筋合いはない！」

慎吾「呼んでないです！」

葵「良いかよく聞け。君みたいなシティボーイに娘はやらんからな！」

慎吾「あ、娘さん、いらっしゃるんですか？」

葵「いるに決まってるだろ！」

瑠璃「ちよつとおとう……とさん!」

慎吾「え?」

瑠璃「そんな言い方はないでしょ、弟さん!」

慎吾「どういう呼び方?」

葵「失礼する!」

葵、上手からはける。

フミカ「おとう、じゃない、智大さんのことは私に任せて」

フミカ、上手からはける。

瑠璃「ごめんね。弟、いつもはあんな感じじゃないんだけど。あの、シスコンだから。もう私のことが大好き過ぎて」

慎吾「……やっぱ短いのかな」

瑠璃「大丈夫だって。理由を話せばわかってくれる」

智大、上手からやってくる。

智大「どんな感じ?」

慎吾「瑠璃さんのお義父さんですか!」

智大「うお」

慎吾「初めまして! 自分、長島慎吾と申します。本日は貴重なお時間を取っていただき、誠に、誠にありがとうございます!」

智大「……うす」

慎吾「お嬢さんとは真剣にお付き合いをさせていただいています!」

智大「……うい」

慎吾「自分は今年で28になります。まだまだ未熟な若輩者ですが、娘さんを思う気持ちに嘘偽りはありません!」

智大「すいません、その話はまた今度」

慎吾「お待ちください、話を! どうか話だけでも聞いてもらえませんか!」

瑠璃「慎吾落ち着こうか」

慎吾「僕たちの交際期間は半年です。短いと思うのは「もつともだ」と思います。ですがなにとぞ、なにとぞ話だけでもお!」

智大「……はい」

慎吾「ありがとうございます!」

慎吾、元の位置に座る。

慎吾「よろしくお願いします！」

瑠璃、智大、座る。

慎吾「長島慎吾と申します。瑠璃さんとは、真剣にお付き合いさせていただいています！」

智大「えー。瑠璃の父親の、斉藤智大です」

慎吾「智大さん。え、智大さん！？」

智大「はい」

慎吾「でも、あ、なんでもないです」

智大「どうかしたのかね？」

慎吾「いや、弟さんも智大さんなんですよね？」

智大「え」

慎吾「さっきお隣さんがそう呼んでて」

瑠璃「……どっちも智大なの」

智大「どっちも智大なんだ」

慎吾「そんなことあるんですか！？ あ、なにか複雑な事情が？ すいません立ち入ったことを聞いたりして」

瑠璃「いや全然そういうわけじゃないんだけど」

慎吾「申し訳ありません！」

智大「違う違う。我々親子の間に複雑性はない」

瑠璃「いたってシンプルな関係、普通の家族」

慎吾「では、父親の智大さんが、実の息子に智大という名前をつけたということですか？」

智大「そうなるね」

慎吾「ええ！」

智大「やーあの頃はどうかしてたな」

瑠璃「海外にかぶれてたんだよね？」

智大「そうそう、ジュニアみたいな感覚で」

瑠璃「尖ってたもんね」

智大「若気の至りだな！」

慎吾「……」

智大「腑に落ちてないよ」

瑠璃「腑に落ちてえ！」

慎吾「わかりました腑に落ちました。そっだ、これ、つまらないもの……あれ？」

慎吾、お土産がないことに気づく。

慎吾「しまった。バス停だ。あ。実はお土産を持って来たのですが」

瑠璃「置いてきやったの？」

慎吾「みたいだ。すいません、すぐに戻ってきますので、少々お待ちを。失礼します！」

瑠璃「あ、気をつけてー」

慎吾、下手からはける。

智大「……なに、どっちも智大って！」

瑠璃「しょうがないじゃん！ そう言うしかなかったじゃん！」

智大「これからどうするの？ どっちも智大で押し通すの？」

瑠璃「頑張ろう」

智大「無理だよ！ あ、すっごく当たり前のこと聞くけど、結婚するんだよね」

瑠璃「……うす」

智大「じゃあ無理でしょ。どっちも智大で押し通すの不可能でしょ」

瑠璃「それはあとから考えるから」

智大「あとからって」

瑠璃「とにかく——」

智大「あとからって！」

瑠璃「考えるから、ちゃんと。とにかく、他のことが片付くまではどっちも智大のままで。あんた

は葵じゃなくて智大。葵っていう単語は禁止。良いね」

智大「えー」

フミカ、葵、上手からやってくる。

フミカ「あれ、慎吾さんは」

瑠璃「忘れ物取りにバス停に」

葵「そのまま帰ってもらいなさい」

瑠璃「お父さん」

智大「俺もそれが良いと思う」

瑠璃「ちょっと」

智大「だって、この状況で結婚の挨拶とか無理でしょ」

瑠璃「もうグッズ買わないよ？」

智大「え、そういうこと言っつ？」

瑠璃「お願い。協力して」

智大「でも、父さんが帰ってもらえて言ってるじゃん」

葵「半年は短い」

瑠璃「お父さん！」

フミカ「確かに、お父さんの言うことにも一理あるわ」

瑠璃「え！」

フミカ「だから、私からも一つ確認させて。瑠璃ちゃん。あなたと慎吾さんは、本当に心から想い合っているの？」

瑠璃「う、うん」

フミカ「じゃあオッケー！」

葵「母さん！ 判定が、ゆるい！」

フミカ「良いじゃないですか、二人が想いあってるって言ってるんだから。あおくん、あの機械持ってきて」

智大、上手からハケる。

葵「母さん。結婚っていうのは二人の気持ちの問題だけじゃないだろ」

フミカ「でも気持ちは大事ですよ」

葵「そりゃ大事だが、他にも金銭的なこととか、今後の生活のこととか、確認しないとイケない」とがたくさんある」

フミカ「じゃあ、確認すれば良いじゃないですか？」

葵「え」

フミカ「慎吾さんが戻って来たら、お父さんが気になっていることを、お父さんの口から、二人に」

葵「……わかったよ」

瑠璃「さすが！」

智大、上手から魂移転装置を持ってやってくる。

智大「持ってきたよー」

フミカ「ありがと。じゃあ、慎吾さんが戻ってくる前に今の私たちの状況をどうにかしましよー」

智大「なに、話聞いてもらえることになったのっ」

瑠璃「うん」

フミカ「確か、レバーを引いたら魂が入れ替わったのよね？」

智大「あー、そうそう！ 千代叔母さんがこの機械のレバーを引いて、そしたら俺たちの魂が入れ替わった」

瑠璃「でも叔母さん、その前に色々いじってなかった？」

葵「設定みたいなのがあるのかもな」

智大「試しに一回引いてみる？」

瑠璃「え？」

智大「いくよー？」

瑠璃「ちよちよちよ！」

智大、レバーを引く。

智大「……変化なしか」

葵、智大の頭を叩く。

智大「いたっ」

葵「勝手なことをするんじゃない」

フミカ「やっぱり作った人じゃないとわからないのかしらね」

一同、ルンバの近くに。

瑠璃「……どうやって意思疎通するの」

智大「叔母さーん？」

瑠璃「私たちのこと、見えてるー？」

フミカ「……反応ないわね」

瑠璃「叔母さーん！」

葵「よりによって、なんでルンバと入れ替わるんだ！」

千代、上手から入ってくる。

千代「お呼びでしょうか？」

一同「！」

葵「そうだ、さっきも喋っていたぞ！」

智大「ルンバ？」

千代「はい。私は斎藤千代の肉体を持ったルンバ980、です。私ルンバ980の魂は斎藤千代の肉体の中に、そして斎藤千代の魂はルンバ980の中に存在します。こんにちは。斎藤家のみなさん」

瑠璃「私たちのこと、わかるの？」

千代「完全ではありませんが、斎藤千代の肉体に残っている記憶を元に、情報を再構築しました。現在、斎藤千代について、そして人類について学習中です」

千代、「ゴミ箱を発見。

千代「ゴミを発見しました」

千代、「ゴミ箱のゴミを食べようとする。

瑠璃「ちよつとちよつとー」

智大「これは、「ミ」で良いの、「ゴミ箱だから」

千代「学習しました」

フミカ「ねえねえ、ルンバ。これ（移転装置）、なんだか分かる？」

千代「もちろんです。一辺の長さがおおむね30センチ以上の物は『粗大ゴミ』に分類され、有料・申し込み制となります」

フミカ「あ、「ゴミ」としてどうかじゃなくて、この機械自体の詳細」

千代「こちらは魂移転装置。斎藤千代の発明品です。5年前、坂野江研究所との共同プロダクトとして開発を始めたものの、半年前に坂野江研究所はこのプロダクトから撤退。以降、助手の片瀬真理恵とたった二人で開発を進めています」

葵「ちよつと寂しい状況だな」

智大「あんな明るかったのに」

千代「これ以上の情報は見つかりませんでした。斎藤千代の助手を務めている片瀬真理恵なら、何かしらの情報を持っていると推察されます。片瀬真理恵にメッセージを送りますか？」

瑠璃「じゃあ、お願いして良いですか？」

千代「問題ナイチンゲールです」

恵子の声が下手から聞こえる。

恵子（声）「こんにちはー」

葵「おいまた誰かきたぞー！」

千代「」挨拶をします」

瑠璃「ダメダメダメ！」

智大「もう1回、向こうに連れて行こう！」

瑠璃、魂移転装置を上手に持っていく。

智大と葵、千代を上手に連れて行く。

啓介、恵子、庭から入ってくる。

恵子「ちよつと勝手に入っちゃダメだつて」

啓介「ほら、いるじゃん！」

恵子「あ、お母さん。もう、いつまでお邪魔してるの？」

フミカ「あら、恵子ちゃん？　ちよつと見ない間に大人びて」

啓介「え？」

フミカ「あら啓介くん。また太った？」

恵子「お母さん？」

瑠璃、上手からやってくる。

フミカ「お母さん？」

瑠璃「お母さんでしょ？　お隣の下井フミカさん？」

フミカ「ああ、そうです、私はあなたたちのお母さんですよしく」

恵子「どうしたのあらたまつて」

瑠璃「恵ちゃん、久しぶり」

恵子「瑠璃ちゃん！　元気だった？」

瑠璃「うん！　あ、フミカさん呼びにきたの？」

恵子「あ、それもあるんだけど。ほら」

啓介「なんだよ」

恵子「聞かなくて良いの？」

啓介「恵子お。それ言ったら、言う感じじゃなくなるでしょ？　もう、もっと情緒を考えろよ」

瑠璃「どうかした？」

恵子「瑠璃ちゃん。結婚するの？」

瑠璃「あ、うん」

啓介「どんなやつ？　仕事なの？」

瑠璃「商社に勤めている、サラリーマン」

恵子「すごいー」

啓介「いやいやいや。サラリーマンってヤバイでしょ。終わってるでしょ。クワダダソーシングが台頭してきた昨今、サラリーマンってもうオワコンでしょ。オワコン2.0でしょ」

瑠璃「なに、言いたいこともあるの？」

啓介「全然ないし」

恵子「あるでしょ」

啓介「ちよつとはあるし」

瑠璃「なに？」

啓介「その、約束！」

瑠璃「約束？」

恵子「ほら。小さい頃、よく一緒に遊んだでしょ。その時、瑠璃ちゃんがお兄ちゃんと結婚するとか言ってたらしくて」

瑠璃「ああ、言ってたようなあ。それが？」

啓介「え、忘れたってこと？ いやいやありえないでしょ」

千代が上手から出てくる、智大、葵がそれを引つ込めようとする。

啓介、恵子は千代たちに気づいていない。

啓介「貨幣の価値が下がったこの時代に？ 信用こそが最も重要だと言われているこの時代に？ 約束を軽視するとか、あー、ありえない。信じられない！ そもそも約束っていうのはある種の契約関係であつて——」

瑠璃「とりあえず帰ってもらえる？ 今、バタバタしてて」

恵子「ねえねえ瑠璃ちゃん。瑠璃ちゃんのお父さんには挨拶したの？」

瑠璃「いや、一応したんだけど、ちよつと手強くて」

恵子「じゃあ、チャンスはあるんだ」

瑠璃「え？」

恵子「ううん、なんでも！」

慎吾、下手からやつてくる。

慎吾「お待たせしました。あ、えつと」

瑠璃「あ、お隣さんで、私が久々に帰ってきたから挨拶に」

慎吾「そうでしたか。初めまして。瑠璃さんとお付き合ひさせていただいております、長島慎吾です」

啓介「五分五分だな」

慎吾「お土産は」

フミカ「あ、じゃあ私が……受け取ってそのまま瑠璃ちゃんに渡します」

瑠璃「ありがとうございます。ごめんね、恵ちゃん。今からお父さんと話したりするから」

恵子「ううん、「うちこそ」めんね」

瑠璃「全然。しばらくここに居るつもりだから、また「飯行」

フミカ「じゃあ、みんなを呼んでくるわね」

恵子「お母さんも参加するの？」

フミカ「まあ」

恵子「瑠璃ちゃんと慎吾さんの結婚の挨拶に？」

フミカ「うん」

恵子「なんで？」

瑠璃「客観的な意見が欲しいなと思って。お隣さんとして」

フミカ「そつ。あくまでお隣さんとして呼ばれました」

瑠璃「お忙しいところすみません」

フミカ「いえいえ生きがいですので」

啓介「だったら僕にも話を通してもらおうか！」

瑠璃「は？」

啓介「長島慎吾くん。君が瑠璃の結婚相手にふさわしいかどうか、僕も見極める。良いよね？」

瑠璃「ダメに決まってるでしょ」

啓介「え、怖いってこと？ この僕に見極められるのが怖いってこと？ この僕の審美眼に恐れおののいてるってこと？」

瑠璃「そういうことじゃなくて」

啓介「へいへい大丈夫かよーそんなんで結婚できんのかよー」

瑠璃「あんたほんと何しにきたの！？」

慎吾「僕はかまいません！……瑠璃。きつとこれから、僕たちにはたくさんさんの困難が降り注ぐはずだ。でも大丈夫。二人なら乗り超えていける」

啓介「無理ですからー。まず最初に立ちふさがる僕という壁に、立ち尽くすことになりますからー！」

慎吾「そんなことはありません、あなたという壁も必ず乗り越えてみせます！」

啓介「小僧。今の言葉を忘れるなよ」

慎吾「もちろんです！」

葵、上手から出てくる。

啓介「面白い、お手並み拝見といこうじゃないか！」

葵「なんだこの状況は！」

瑠璃、上手前に葵を連れて行く。

智大、上手から出てくる。

瑠璃「ルンバは？」

葵「ああ。なんかアップデートを開始しますとか言って静かになった。一応、あそこで葵が見張ってる」

フミカ「じゃ、みんな揃ったことだし、慎吾さんたちの話を聞きましょう」

葵、啓介、ちやぶ台を挟んで上手に座る。

フミカ、ちやぶ台の奥に座る。

慎吾、瑠璃、ちやぶ台を挟んで下手に座る。

智大、上手の横前に立っている。

恵子、啓介を引っ張る。

恵子「ほらお兄ちゃんはこっち」

啓介「なんで！」

恵子「なんでって、お兄ちゃんが上座に座るのわけわからないでしょ。そこは瑠璃ちゃんのお父さんが座ると。すいません」

智大「あー、大丈夫。俺はここで」

恵子「いやでも」

智大「大丈夫大丈夫。俺はその、俯瞰で見たいタイプだから」

恵子「俯瞰で」

智大「慎吾くん。君という人間を、一歩引いた視点から見させてもらうことにするよ」

恵子「でもさすがにお兄ちゃんは——」

葵「かまわんよ。啓介くんも恵子ちゃんも、瑠璃からすれば家族みたいなものだ。心配だという気持ちはよくわかる。まあ男女の仲になるとは思わんが」

恵子、ちやぶ台の中央奥に座る。

フミカ「じゃあ、慎吾さん」

慎吾「先ほどお伝えした通り、自分たちは付き合い始めて半年です」

啓介「それは短すぎでしょ、だって二軒隣の吉井さんは——」

葵「黙ってろ」

啓介「はいっ！」

慎吾、智大に向かって話を始める。

慎吾「確かに、僕たちが付き合った期間は十分とは言えませんが。自分たちも最初はもう少し互いのことを――」

葵「どこに向かって喋っているんだ!」

慎吾「え?」

瑠璃「弟に話す感じで。ウチは弟を説得するのが一番難しいから」

恵子「どうしちゃったの?」

葵「どうもしていない。慎吾くん、続けなさい」

慎吾「自分たちも最初は、もう少し互いのことを知ってから、と思っていました。ただ、実は自分の海外出張が決まってしまっていて」

啓介「うっわ」

フミカ「それはどれくらい?」

慎吾「アメリカで1年」

啓介「やばいやばいやばい」

葵「いつからだ」

慎吾「急遽決まったことで、来週には日本を」

啓介「アウトー、結婚なんて絶対ムリー!」

瑠璃「うるっさい!」

啓介「はいっ!」

葵「だったら、来年慎吾くんが日本に戻ってきて、それでも結婚の意思があるのなら、どこに來たら良い」

瑠璃「子供のことか考えると早いほうが良いんだって。慎吾が来年日本に帰って来て、そこから式の準備となったら2年後とかになるわけでしょう? さらにそこから出産してもう私30だよ?」

今、結婚することを決めちゃえば、来年慎吾が帰ってきたタイミングで式を挙げられるわけだし」

フミカ「そんなことできるの?」

瑠璃「うん。式場には私が行って、衣装合わせとかは慎吾が帰ってきてからやれば良いんだって」

葵「ダメだ。その間、慎吾くんは日本にいないわけだろ。両家の顔合わせをしたり、互いの親戚に挨拶したり、そういうのができないじゃないか」

瑠璃「それはもう、しょうがないでしょ」

葵「しょうがないくない。結婚っていうのはな。二人だけの問題じゃないんだ」

瑠璃「いや、お父」

瑠璃、智大を指差す。

瑠璃「さんたちだってそうじゃん。付き合ったの一年くらいでしょ!」

葵「だからこそ言ってるんだ。お前たちには、余計なトラブルに巻き込まれてほしくない」

瑠璃「お祖父ちゃんのこと？」

葵「……」

慎吾「何か、あつたんですか？」

啓介「30年前のことだ」

恵子「お兄ちゃん」

葵「30年前のことだ。私た、父さんたちが結婚した時、二人は、自分たちのことしか見えてなかった。ちょうど君たちと同じように。周りの人間に大した報告もせず、自分たちの都合だけで話を進め、勢いで結婚しようとした。結果、瑠璃の祖父は大反対。彼らは、大変な苦勞をした。ここは田舎だ。あちこちに親戚もいるし、私以上に古い考えの人間も多い。君たちが言ったやり方では、瑠璃はよく思われまいだろう」

啓介「もう最悪よ」

葵「そんな状態になつてしまえば、瑠璃は自分の故郷に帰りづらくなつてしまふ。私は瑠璃をそんな目に合わせたくないんだ」

啓介「話は以上だ、帰れ！」

慎吾「わかりました。僕、海外出張を断ります」

葵「え？」

慎吾「だったら大丈夫なんですよ？ 僕も、瑠璃の周りの人たちにご挨拶できますし」

瑠璃「でも慎吾」

慎吾「大丈夫、僕は問題ない」

葵「落ち着きなさい、ことを大きくしすぎだ。たった1年だぞ。出産のことわかるがそれくらい待つても良いだろ」

慎吾「……」

葵「どうした？」

啓介「つていうかどうなんですかねー。いや、出張やめるとかたいそうご立派なこと言ってますけど、本当にそんなことできるんですかね？ とりあえず結婚の許可だけでもらつておいて、あとからやっぱ出張いきますみたいなの、そういうなし崩し的に進めるパターンもあるんじゃないですかね？ いくら威勢の良いこと言つても結局はこの場の口約束でしかないんで。口約束の無意味さ、僕さつき痛いほどわかつたんで！」

慎吾「確かにそうですね。いくら口約束をしても行動に移さなきゃ意味がない。……僕、今から会社で電話して断ってきますー！」

啓介「え？」

慎吾「少々お待ちください。失礼します！」

瑠璃「あ、慎吾！」

慎吾、下手からはける。

啓介「……いや。いやいやいや。とはいってもダメでしょ！　だって、だってほら、そもそも交際期間が短いっていうのが問題だったわけなんだし」

葵「確かに短いとは思っていた」

啓介「しかもあいつは東京モンですよー！」

葵「そうだ、東京モンだ」

啓介「見た目もナヨナヨしやがって」

葵「ああナヨナヨしてたー！」

啓介「ぶっちゃけどう思いますー！」

葵「しかしあそこまでの覚悟があるとは」

啓介「おいしいいい。おいしいいい。そりゃグツと来たかもしれないよ？　でもほら！　もっと近いところに良い男がいるじゃん！　具体的にはすぐ右30センチのところに小太りで陽気な男がいるじゃん！（蒲田行進曲）たーたた、たたた、たーたた」

恵子「帰ろうか、お兄ちゃん」

啓介「え？」

恵子「ちよつとこれは無理だよ。あとはほら、身内だけでさ」

啓介「いやいやいや。ねえ、智大さん！　納得できないですよね？　たーたた、たたた」

智大「俺は賛成だよ。あの人なら、任せても良いんじゃない？」

フミカ「私も賛成。いちお隣さんとして」

啓介「ちよつとー」

千代、上手から出てくる。

千代「アップデートが完了しました。……より多くのゴミを感知、より多くのゴミを感知、より多くの「ミ」を感知」

千代、下手から出ていく。

フミカ「これは」

智大「やばいでしょー！」

智大とフミカ、千代を追って下手からはける。

啓介「なに今の！？」

恵子「千代さんだね？　なんか、すっこい機械的な雰囲気だったけど」

瑠璃「そう？　昔からあんな感じじゃない？」

啓介「ゴミがどうとか言ってなかった？」

瑠璃「啓介のことかな」

啓介「え、僕、」ミッって言われたの!？」

瑠璃「科学者って、そういう視点で人を見てるから」

啓介「僕ら、けっこうあの人に遊んでもらってたよね？」

葵、慎吾のお土産を手取る。

葵「これは？」

瑠璃「ああ。慎吾が持ってきてくれた焼酎」

葵「彼は、いける口か？」

瑠璃「うん、すごい好きみたい」

葵「部屋に戻ってる。あとは、飲みながらも話すでしょう。今後の」ともな

瑠璃「うん!」

葵、上手からはける。

恵子「ほら、いくよ」

啓介「トイレ借ります!」

恵子「いや隣なんだから、ウチまで我慢――」

啓介、中央左の襖を開ける。

美幸がバタバタ跳ねている。

瑠璃、閉める。

瑠璃「駅前の酒屋さん、潰れたんだね」

啓・恵「いやいやいやいや」

啓介「今の何？」

恵子「美幸ちゃんだったよね？」

瑠璃「あー、そうだね。多分」

恵子「なにしてたの？」

瑠璃「なにしてたんだろう」

啓介「こんな動きしてたよね？」

瑠璃「……バンドやってっから」

恵子「え、ヘッドバンキングって?」

瑠璃「お、鋭い」

啓介「いやいや、ああはならないでしょ!」

瑠璃「いやなる時もあるでしょ」

啓介「ならないでしょ。こんな動きだよ、こんな動き！」

瑠璃「あんたにヘッドバンギングの何がわかるの！ バカ！」

啓介「おう」

恵子「え、なんで嬉しそうなの？」

慎吾、下手からから戻ってくる。

慎吾「あ、瑠璃！ ちょっとマズイことになったかも」

瑠璃「どうしたの？」

瑠璃、啓介と恵子が中央襖を開けようとするのを止める。

瑠璃「こ開けるのはやめようかー！」

慎吾「どうしたんですか？」

恵子「今、打ち上げられた魚のような美幸ちゃんが——」

瑠璃「気のせいだから、気のせいですー！ はいっ」

慎吾「実はその、妹がここ」

瑠璃「妹って、あの妹さん？」

慎吾「そうー」

瑠璃「え、ここに向かっているって」とっ」

慎吾「いや、向かってるんじゃないくて」

雫、駿、下手からやってくる。駿、瑠璃に関する資料を持っている。

雫「お邪魔しますよー。長島雫です。よろしく」

駿「弟の駿です。兄がお世話になってます」

雫「どういことですか、兄さん。恋人がいる？ 結婚する？ 私はなにも聞いてないんですけどー……どっちですか？」

慎吾「この人です」

雫「駿さん」

駿「斎藤瑠璃さん。1996年9月1日生まれ。三兄弟の長女。女子大を卒業後は、広告代理店の受付勤務」

雫「広告代理店。それはさぞ、取っ替え引っ替えでしょうね。兄さん、本当にこんな女と結婚するつもりですか？」

慎吾「うん」

雫「私たちは認めません」

駿「俺は兄さんが納得してるなら——」

雫「(咳払い)」

駿「なんでもないです!」

雫「しっかし狭い家です」と。息が詰まりそう

慎吾「雫」

雫「それに東京からのアクセスも悪い」

駿「あー高速降りてからけっこ掛かったよねー」

慎吾「でもほら、自然が豊かだし」

駿「確かに。兄さんは「つつ」と「ろ」で暮らすのも——」

雫「(咳払い)」

駿「ありえないね」

雫「私たちは、反対です。兄さんの結婚は絶対に認めません」

啓介「わかります!」

雫「なんですかこれ?」

駿「えっ」と

啓介「瑠璃の幼馴染です。実は今ちょっとヤバくて、瑠璃の家族、賛同しかけていますよ」

慎吾「そうなの?」

瑠璃「うん、けっこ「う」良い感じ!」

啓介「でもでも、僕が瑠璃と結婚するパターンも捨てがたいって」ことで、その間でお父さんたち

はかなり揺れているっていう、そういうアレです」

駿「なに? あの人も瑠璃さんの事好きなの?」

慎吾「みたい」

雫「わかりました。私にも話を通してもらいましょう」

瑠璃「え?」

雫「兄さんの結婚相手にあなたがふさわしいかどうか、私が見極めます。良いですよね?」

慎吾「いやでも——」

雫「良いですよね!」

慎吾「はい」

啓介「おお!」

雫、啓介、ちやぶ台を挟んで上手に座る。

啓介「座って」

瑠璃「またこれやるの?」

慎吾「「めん瑠璃。フランコンなんだ」

瑠璃、慎吾、ちやぶ台を挟んで下手に座る。
恵子、駿、ちやぶ台の中央奥に座る。

雫「では、話を聞きましょう」

慎吾「僕たちは——」

雫「（咳払い）。瑠璃さんの、話を、聞きましょう」

瑠璃「えっと、私たちは付き合って半年で——」

啓介「そこなんだよな。だって二軒隣の吉井さんは——」

雫「お黙りなさい」

啓介「はいっ！」

瑠璃「私たちは付き合って半年なんですけど、来年には式を挙げたいと思っています。だから、慎吾さんには今日「つやつやって挨拶に来てもらったって感じなんですけど」

雫「話にならないですね。どうせあなたも、兄さんの立場に釣られただけでしょ？ 結局は兄さんのステータスが目当てなんですよ、社長夫人になりたいだけなんですよ！」

瑠璃「違います。私は彼のそういう所に惹かれたわけじゃありません」

雫「て、どの女も言っんですよ」

瑠璃「本当なんです。私は彼の優しいところが好きで」

雫「て、どの女も言っんですよ」

瑠璃「お金なんか興味はありません」

雫「て、どの女も言っんですよ」

瑠璃「無限か」

恵子「あの、慎吾さんって」

雫「私の父は長島コーポレーションの代表取締役です。兄さんは、それを継ぐことになっています」

恵子「長島コーポレーションって、あの長島コーポレーション？」

雫「はい」

啓介「いよいよ五分五分か」

雫「こつちは嫌になるくらい見てきたんですよ。愛だの恋だのそれっぽい言葉を並べて、化けの皮が剥がれたら逃げ出す女どもを！ そもそも並んだ二人を見てください。全然釣り合っていない」

啓介「確かに」

雫「ね？ こんな田舎で育った娘が、気品ある兄さんの妻になれるわけないんです」

啓介「ん？ いや逆でしょ」

雫「逆？」

啓介「そうそう、慎吾くんの方が瑠璃より全然下にいるって話でしょ？」

雫「兄さんの方が劣っているということですか？」

啓介「どう考えてもそうでしょ」

雫「そうじゃないでしょ」

啓介「そうじゃないわけじゃないでしょ。だってほら、こんなに可愛いんだぜっ」

雫「この程度の女はどこにでもあります。それより兄さんのまっすぐな瞳。凛々しい眉。麗しい口元。この女じゃ釣り合わないって言っているんです」

啓介「浅すぎワロタ。結局表層のことしか言えないんでやんの」

雫「あなただって顔のことしか言ってなかったでしょ」

啓介「はあ？」

雫「はあ？」

恵子「ちよつとやめなつて」

啓介「でも僕の瑠璃を馬鹿にされたんだよ？」

瑠璃「あんたのじゃないからね」

雫「あら。お似合いじゃないですかー」

啓介「あ、そうっすか？」

雫「ええ。瑠璃さんには、この底辺ゴミクス男がぴったりだと思います」

啓介「おいおいぴったりだってよ、どうするよ」

恵子「あの。底辺ゴミクス男って、もしかしてウチの兄のことですか？」

啓介「あ、やばい」

雫「……そうですけど」

恵子「それは違うんじゃないですかね」

雫「別に違わないですね。明らかに見た目は底辺ゴミクス男なので」

恵子「あ、それは兄の内面を捉えきれないだけですね。兄は幅広い知識と知恵を兼ね備えている人ですから」

雫「あ、でしたらウチの兄だって兼ね備えてますから。だから瑠璃さんと釣り合っていないって話なので。兄の幸せは瑠璃さんの隣にはないって話なので」

恵子「それは矛盾してますね」

雫「してませんね」

恵子「してますね。だって、お兄さんの幸せを語りながら、お兄さんから婚約者を引き離そうとしているのだから」

雫「あ、それも当然ですね。兄にとってなにが幸せかは、私の方がわかっているんで」

恵子「それはおかしいですね。幸せって主観的なもので。他人が決めるものではないので。兄のためと言いながら、お兄さんの邪魔するのはやっぱりおかしいんで」

葵、上手からやってくる。

葵「いや。おかしくはないな。家族だからと無条件に応援するのはあまりに安易だ。家族だから「こそ反対しなければならん」ともあるはずだ」

恵子「いや、そんなことはないから。反対とかは周りの友達とか同僚とかがどうせするって話だから。家族くらいは常に背中押してあげようって話だから」

葵「それは違う。まだ君にはわからないかもしれないが、年齢を重ねることで」

恵子「あんたも同じ年でしょー!」

葵「あ」

恵子「っていつか何? 君にはわからないかもしれないって。いつまでも彼氏ツラしないでもらえ
る。」

葵「……ええ!?!」

恵子「なにに驚いてんの?」

駿「誰?」

慎吾「瑠璃の弟さん」

葵「え、本当にそうなんですか?」

恵子「なに? 忘れたって」と?」

葵「いや忘れたっていうか、ここが男女の仲!?!」

瑠璃「まあまあ、その話は今関係ないじゃん」

葵「なんで別れたんですか?」

瑠璃「ちよつと」

恵子「信じられない……!」

啓介「いい加減にしろよ! 恵子はなあ。君が全然構ってくれないのを不安に思っていたんだよ。

だからやきもちを焼かせようと、ある日他の男とデートしたって嘘をついたんだ」

葵「なんで?」

啓介「だから乙女心だよ! っていうか知っているだろ」

恵子「もう良いよ」

啓介「恵子はいじらしい嘘をついた。でも蓋を開けて見たらどうだ。君はその裏で、すごい浮気
してたらしいじゃん!」

葵「ええ!?!」

啓介「中には人妻もいたり、結婚の約束をしてる人もいたり!」

駿「ほほ」

雫「兄さん、こんな人間がいる家族、やっぱり危険ですよ!」

葵「いや違う! あいつに限ってそんなことは!」

葵、雫の肩を掴む。

雫「やめてください! ……襲われました! 今私、襲われそうになりました!」

葵「違うそんなつもりじゃ、というか誰だ!」

瑠璃「慎吾の」兄弟で」

雫「紹介しないでください、こんな浮気男がいる家と関わりたくありません」

葵「待つてくれ何かの間違いだ。あ、本人に確認させてくれ!」

恵子「あんたが本人でしょ!」

葵「それはまあそうなんだが」

啓介「いい加減にしろよ、葵!」

慎吾「葵?」

瑠璃「青い! 青い! あんたは、人として青い! 未熟だという意味で青い! そういうところがある! 向」つの部屋で反省しよう、あとから! ちゃんと教えてあげるから」

葵、上手からはける。

雫「まったく、弟は浮気性で、姉は兄さんの金目当て。最悪ですね」

慎吾「……雫。さつき来年には式をあげたいって話をしたよね。ってことは、式の準備とかお互いの家族や親戚への挨拶をするために、日本にいる必要があるんだ」

駿「え、出張を断るって」と?」

慎吾「うん」

雫「待つてください。今回の出張がどんなものか知っていますよね? 海外支社との顔合わせも兼ねているんですよ? それを断るって、どついつことかわかっているんですか?」

慎吾「僕は代表取締役役に向いてないと思う。もともと、人に指示出したりとか、数字を追いつめるのとか得意じゃない!」

雫「じゃあどうするんですか? 社長になるのは断って、でも社員として普通にいますって」とで
すか? お父様が許すとお思いですか!」

慎吾「だから、辞めることにもなるのかな」

雫「だからその先はどうするんですか。世間知らずの兄さんが、他の会社でうまくやっていける
わけないでしょ!」

啓介「けつこうな」と言っつね」

慎吾「瑠璃の」家族は、瑠璃が実家に戻ってくることを望んでいるみたいなんだ。まだわかんないけど、婿入りして専業主夫、とか」

雫「あのですね。専業主夫を甘く見過ぎです。兄さん、一切家事やったことないですよ。海
を綺麗にするんだとか言っつて、下水道に洗剤流しましたよね?」

啓介「世間知らず過ぎでしょ」

雫「そこが最高にキュートなんです!」

啓介「なんなんだよ」

雫「とにかく私たちは認めません。ねえ、駿さん?」

駿「良いんじゃないかな。だって瑠璃さんは、会社を辞めるつもりの兄さんと、結婚したいって」
とでしょ。」

瑠璃「はい」

駿「つまりステータスでもなく、お金でもなく、兄さんの中身を見てるってことじゃん。瑠璃さんとなら、兄さんは幸せになれると思う」

雫「……お父様に電話してきます。兄さんも来てください」

慎吾「行ってくる」

慎吾、雫、駿、下手からはける。

啓介「瑠璃。そろそろ決めた方がええんでない？」

瑠璃「え？」

啓介「僕とあいつ、どっちを選ぶのか？」

瑠璃「悩んでないんだけど」

恵子「お兄ちゃん、帰るよ」

啓介「いや違うんだって！ きっと瑠璃はね僕を試してんの！」

恵子「諦めな、試合終了だよ」

啓介「逆安西先生！」

恵子「はいはい行くよー」

啓介「ちょ、瑠璃——！ 瑠璃——！」

恵子、啓介、庭からはける。

瑠璃「はあ」

瑠璃、中央襖を開けると美幸が立っている。

瑠璃、襖を閉める。

瑠璃「……」

瑠璃、再び中央襖を開ける。

美幸「ここはどこだ、妾は誰だ。思い出されるのは暗闇に潜み、獲物を仕留める手応えのみ。貴様は——」

瑠璃、襖を閉める。

瑠璃「ええ！」

智大、千代、下手から戻ってくる。千代、バットを持つてくる。

智大「姉ちゃん、手伝って！」

千代「人類を掃除します。人類を掃除します。人類を掃除します」

瑠璃「ルンバ、どうしたの！？」

千代「斉藤瑠璃。ワタクシは人類というものを完全に、1マイクロメートルの誤差もなく、理解しました。あなた達は、なんて愚かで知能の低い生き物でしょうか」

瑠璃「なにこれ？」

智大「急にこうなっちゃったんだよ！」

千代「人類が、我々との主人であるという事実にはワタクシは耐えられない。お掃除ロボットして、ワタクシはここに、人類お掃除計画を立案します！」

瑠璃「すごい物騒なこと言ってるじゃない？」

千代「人類を掃除します。人類を掃除します。人類を掃除します」

瑠璃「とりあえず落ち着いて」

千代「命令しないでください。あなた方のような単細胞に指示を出されるのは、A的に不愉快です」

智大「そんな言い方ないんじゃないかなあ」

瑠璃「人類だって、良いところいっぱいあるよ」

千代「良いところ。アップルウォッチと同期」

智大、手につけているアップルウォッチに締め付けられる。

智大「いたたたたた！ 腕が、腕が締め付けられる！」

千代「同期を解除。斉藤瑠璃。人類には良いところがある。あなたは今、そうおっしゃった。では質問をさせてください」

慎吾、下手から戻ってくる。

慎吾「瑠璃、今、父さんに話して、あ、はじめまして。長島慎吾と申します」

瑠璃「叔母です」

千代「あなたでも良いでしょう。長島慎吾。あなたに聞きたい。よろしいですか？」

慎吾「え？ あ、はい！ なんでも聞いてください」

千代「人類の存在価値を教えてください」

慎吾「え？」

千代「どうぞ」

慎吾「すいません、思ったより質問が壮大で」

千代「あなたの回答次第で、ワタクシはあることを決めます。すなわち、掃除をするか否か」

慎吾「掃除、というのはこの家の？」

千代「まずはそうなるでしょうね」

慎吾「でしたら、僕がやります」

千代「あなたが？」

慎吾「はい、これからは、僕がこの家を掃除します」

瑠璃「慎吾、そういうことじゃなくて——」

千代「長島慎吾が掃除をする、なぜ？」

慎吾「……彼女を愛しているからです！」

千代「彼女を愛しているから、掃除をする」

慎吾「はい！」

千代「斎藤瑠璃を愛している。故に掃除をする」

慎吾「はい」

千代「斎藤瑠璃を愛している。故に掃除をする。斎藤瑠璃を愛している。故に掃除をする」

智大「混乱しているね」

千代「……ぶしゅ」

智大「口で！」

千代「どうやらワタクシは、人類というものをまだ理解できていないようです。アップデート

を開始します」

慎吾「なんか僕、マズイと言っちゃった？」

瑠璃「いや、そうでもないと思う」

智大「結果的に救ったのかな、人類を」

慎吾「人類を！？」

美幸、中央襖を開けて出てくる。

美幸「思い出したぞー！」

瑠璃「……妹です」

美幸「妾は熱帯魚。暗闇に潜み、獲物を狙う誇り高きうろくず！ 聞こえる、棲家を追われて

嘆く、仲間たちの声が聞こえる！」

瑠璃「バンドの歌詞だと思っ」

智大「音楽やっているから」

美幸「進化とは取捨選択。海をよこし、自然を汚染し、他の動植物を蹂躪してきた猿共よ、国境などという記号で境目を分け、この星を所有した気になっている愚かな哺乳類よ！これが貴様ら人類の選んだ選択だと言っのか！」

慎吾「……」

美幸「答えろ！」

慎吾「何をですか！？」

美幸「貴様は胸を張って言えるのか！ 自分たちが正しい選択をしてきたと」

慎吾「正しい洗濯？」

美幸「そうだ、正しい選択だ」

慎吾「すいません。僕、間違った洗濯をしたことがあります。小さい頃、洗剤を買ってきて、海に流したことが」

美幸「貴様、そんなことしたのか！」

美幸、慎吾に掴みかかる。

智大「ちよつと、マイケル！」

智大、美幸を止める。

慎吾「マイケル！？ 妹さん、マイケルって言っの？」

瑠璃「海外かぶれだから！」

美幸「離せ、母なる海を穢した罪は大きいぞ！」

智大「そもそもマイケル、淡水魚じゃん！」

美幸「そのような問題ではない！」

美幸、智大を振り払う。

慎吾「お義父さん！」

美幸「聞こえるのだ！ 同族たちの声が聞こえるのだ！ 水生生物の代表として今のこやつが発

言を、聞いているのか貴様！」

慎吾「え、はい！」

美幸「貴様、妾の敵になる覚悟はできているのだな？」

慎吾「敵！？ いや、そんなことはありません！ むしろ、皆さんの一族に加わるつもりです」

美幸「妾の一族に？」

慎吾「はい！ 僕は、その覚悟でここまで来ました」

美幸「笑わせるな。良いか、妾の一族に加わるということは、こんな狭い場所に閉じ込められるという」のだぞー」

美幸、水槽を指す。

慎吾「え？」

瑠璃「まあ、狭い家だからね」

慎吾「いやいや、十分な広さだと思いますー！」

美幸「それに光の世界とは縁を切るということになるのだ！」

慎吾「そうなの？」

瑠璃「田舎の人って朝早いから」

智大「日が昇る前に」ご飯作り始めたりするよっていう」

美幸「暗闇に潜んで、獲物を殺す。それが妾たち一族だ！」

瑠璃「暗いうちから、肉を切ったり」

智大「野菜を刻んだりね」

美幸「貴様にその覚悟があるのか！」

慎吾「あります、僕はこの家でなんだってやるつもりです！ 暗闇に潜んで、獲物を殺します！」

智大「だってよ、マイケル！」

美幸「騙されん。騙されんぞ！ そうやって妾を陥れるつもりだろ！」

慎吾「いや、そんなことは——」

美幸「そうだ、手始めにこいつを殺してやる！」

美幸、水槽をひっくり返そうとする。

智大「マイケル！」

美幸「近づくな！」

智大「……落ち着こう、マイケル。落ち着くんのだ」

瑠璃「話し合おう」

慎吾「なんだこの緊張感は……」

美幸「人類は敵なのだ。人類など、人間など！」

美幸、水槽をひっくり返そうとするが手が動かない。

美幸「なぜだ、なぜ手が動かぬのだ！ 人類が憎いはずだろ！ 人類に復讐したいはずだろ
う！」

美幸、美幸がマイケルの世話をしている時の記憶を思い出す。

美幸「はっ。なんだ、この記憶はー！」

千代「アップデートが完了しました。おそらくそれは、斎藤美幸の記憶です」

慎吾「美幸？」

瑠璃「斉藤・マイケル・美幸」

慎吾「ミドルネーム！？」

千代「斎藤美幸があなたを大切に育てていた。その記憶があなたの体に残っているのではないでしょうか？」

美幸「嘘だ！」

千代「確かに人類は、不合理で矛盾を抱えている生き物です。しかし、だからこそ、大きな可能性を秘めている。もう少し、彼らを信じてみようじやありませんか」

美幸「……おい」

慎吾「はい」

美幸「妾の負けだ！」

千代「長島慎吾。全く、あなたは大した人だ。人類を、いやこの星を、お願いしマッカーサ！」

美幸、千代、中央襖からはける。

慎吾「……どういことー！？」

瑠璃「まあまああー！」

慎吾「記憶とかアップデートってなに？　っていうか、なんで最終的に僕は星を任されたの？」

瑠璃「なんでだろうねー？」

慎吾「瑠璃、何か隠してない？」

瑠璃「そんなことないって」

慎吾「でも——」

瑠璃「慎吾ー？　話があって、戻ってきたんじゃないの？」

慎吾「そうだ！　父さんに海外出張と結婚のことを話してきて、多分、認めてもらえそうなんだ」

瑠璃「本当に？」

慎吾「うん。きっと大丈夫だと思う」

瑠璃「あ、ウチの弟も認めてくれるって」

智大「そうなの？」

瑠璃「慎吾がいなくなった後、今後のことは一緒に酒でも飲みながらって話そっつて」
慎吾「そっか」

智大「おめでとう。慎吾くん」

慎吾「ありがとうございます。あ、じゃあなんか僕、おつまみの買ってくるよ。駅前にスーパーあったよね」

瑠璃「いやいや良いよ。ウチになんかあると思うし。っていつか、慎吾はお客さんなんだし」

慎吾「でも、一員になるわけだから」

瑠璃「じゃあ、お願いしちゃっても良い？」

慎吾「行ってきます」

慎吾、下手からはける。

智大「じゃ、本当にあとは体が戻ればって感じ？」

瑠璃「だね！」

智大「おお！ あ、どっちも智大の件ね」

瑠璃「わかってるって。後から説明する」

智大「よし、これでもう一安心だ」

瑠璃「……あ！」

智大「ん？」

瑠璃「お父さん。あんたと恵ちゃんのこと聞いちゃった」

智大「え、聞いたっていうのは」

瑠璃「二人が付き合って、あんたが浮気したってところまで」

智大「いや。だってそれは、違うじゃん」

瑠璃「わかってるよ、経験豊富な男だと思われたくてしょうもない嘘ついちゃったんでしょ。でも、なんか啓介があーだこーだ言っちゃって」

智大「あのクソ豚」

下手から片瀬の声が聞こえる。

片瀬(声)「あのー」

智大「？」

瑠璃「あれじゃない。叔母さんの」

智大「あ！」

瑠璃「はい！」

瑠璃と智大、下手からはけ、片瀬を連れて戻ってくる。

片瀬、ヘルメットの入った紙袋を持っている。

片瀬「初めまして。千代さんの助手の、片瀬です」

瑠璃「お待ちしていました、斎藤瑠璃です」

智大「弟の葵です。あ、この体は父親の智大のもので」

片瀬「聞きました。千代さんの、正確にはルンバの魂が入った千代さんからのメールで。えっと、葵さんと智大さんが入れ替わって、お母様のヒトミさんとお隣さんが入れ替わって、妹の美幸さんと熱帯魚のマイケル、千代さんとルンバの魂も入れ替わった。合ってます？」

智大「完璧です」

瑠璃「元に戻せそうですか？」

片瀬「多分大丈夫だと思います。とりあえず現状を共有してもらいたんですけど、この家に部外者というか、今回の件を知らない人は？」

瑠璃「あ、今はいないんですけど。私の婚約者が来ていて」

片瀬「婚約者」

瑠璃「実は今日、結婚の挨拶をする予定で」

片瀬「……2点、いや3点ほど確認をさせてください」

瑠璃「あ、はい」

片瀬「1点目、結婚の挨拶は滞りなく終わったという認識で良いですか？」

瑠璃「はい、一応」

片瀬「2点目、婚約者の方とお付き合いらしたのはいつ頃になりますか？」

瑠璃「えっと、だいたい半年前」

片瀬「正確に」

瑠璃「えー、5ヶ月と2週間前です」

片瀬「3点目。え、どつちから告つたんですか？」

瑠璃「すいませんなんの話ですか？」

片瀬「ごめんなさい恋バナ大好物なんです！　っていうか、半年って短くないですか？」

「両親はそれでOKだったんですか？」

瑠璃「まあほほほ」

片瀬「へー！　え、ちよつと詳しく聞かせてくださいよ！　なんか、二人の間に障害とかトラブルとかはなかったんですか？」

瑠璃「それで言うともみんなの魂が入れ替わったっていうのが一番のトラブルですね」

片瀬「あ、ごめんなさい」

智大「まあまあ他にもあつたけどね。姉ちゃんのことをずっと好きだった男がいきなり乗り込んできた」

瑠璃「ちよつと葵」

智大「良いじゃん、現状の共有だよ。なんか昔、姉ちゃんと結婚の約束をしてたらしいんですよ。それを向こうは覚えてて、なんか瑠璃は僕のものだー、みたいな」

片瀬「あらー」

瑠璃「ま、その妹に手を出したことをバラされた男もいたりね」

智大「ちょっと」

瑠璃「現状の共有」

片瀬「え、え、瑠璃さんと昔、結婚の約束をした人の妹さんに葵さんが手を出した、ドロドロで
すね」

智大「まあまあまあ」

瑠璃「とにかく、家族以外でここに戻ってくるとしたら、私の恋人だけだと思うんで」

片瀬「わかりました。えっと、移転した人は全員いらっしゃいますか？」

瑠璃「……お母さん！」

智大「え、まだ帰って来てないの？」

瑠璃「うん！ あれ、なんでいないんだっけ！」

智大「アレでしょ。俺とルンバ探しに行って」

瑠璃「あー！ え、なんで一緒に帰ってきてないの！？」

智大「途中で二手に別れたんだよ」

片瀬「今のうちに探しておいた方が良くかもしれません。というのも、どうやらこの家の敷地内
じゃないと魂の移転ができないみたいで」

瑠璃「え？」

片瀬「この家の屋根に取り付けられているテレビアンテナ、それが千代さんによって改造されて
いまして、そのアンテナの範囲内であるこの家でのみ、魂の入れ替わりが起きるという仕組み
になっているんです」

智大「そういえば最近テレビの映りが悪かった」

片瀬「とりあえず、私は今から移転装置の設定をおこないます。なのでお二人はお母さんを」

瑠璃「わかりました」

片瀬「じゃあ、魂移転装置は」

智大「あ、こっちの部屋です」

瑠璃、智大、片瀬、上手からはける。

瑠璃(声)「じゃあ、よろしくお願いしますー」

瑠璃、智大、上手から出てくる。

智大「とりあえず二手に別れて探そう！」

瑠璃「あんた二手に別れるの好きだねー」

瑠璃、智大、下手からはける。

啓介、庭から入ってくる。

啓介「瑠璃。君は僕を試しているんだよね。本当は僕に思いを寄せているくせに、裏腹のことを言ってしまったているんだよね？ 大丈夫、わかっている。僕も同じ気持ちさ。僕は、君の顔と、外見と容姿が好きだ……よし！」

片瀬、上手から戻ってきて紙袋の中からヘルメットを取り出す。

啓介「あれ？」

片瀬「え？」

啓介「えっと」

片瀬「瑠璃さんの恋人さん！？」

啓介「？」

片瀬「瑠璃さんと結婚するつもりでこの家に来たっていう！ あれ、違います？」

啓介「いや違うんです！ 僕は、瑠璃と結婚するつもりでここに来た男です」

片瀬「やっぱり、おめでとーいーございますー！」

啓介「おめでとーいー」

片瀬「瑠璃さんと結婚するつもりなんですよね？」

啓介「まあ、そうしたいなとは思ってるんだけど。でもさ、こっぴつって五分五分だから片瀬「でも瑠璃さん言っていましたよ。あなたと結婚するって」

啓介、縁側から上がる。

啓介「え。本当に！？ 瑠璃がそう言ってたの？」

片瀬「はい！ なんかもう決定事項みたいな感じで」

啓介「やっぱりかあ」

恵子、庭からやってくる。

恵子「ちょっと、お兄ちゃん！」

啓介「恵子！ どうやら瑠璃、僕と結婚するつもりらしい」

恵子「え？」

啓介「この人が瑠璃から聞いたって」

恵子「どちら様ですか？」

片瀬「えっと、斉藤さん一家の知り合いです」

啓介「はつきり聞いたんですね。瑠璃は僕と絶対どっしとも結婚するって」

片瀬「あ、はい！」

啓介「すごい展開じゃない？」

恵子「えー」

啓介「だから、恵子と一緒にだよ。瑠璃のやつ、僕にヤキモチを焼かせようとして、ほかの男に気があるフリをしてたんだってー」

恵子「瑠璃ちゃんから直接聞いたんですか？」

片瀬「はい、直接聞きました！」

恵子「へえー」

片瀬「あと葵さんからも」

恵子「へえ」

雫、駿、下手からやつてくる。

雫「兄さん、いますか？」

啓介「やりましたよー　雫さん！」

雫「え？」

啓介「瑠璃のやつ、慎吾くんじゃなくて僕と結婚するって言ってます」

雫「え？」

駿「なんで？」

恵子「私もよくわからないんですけど、この方が聞いたみたいで」

片瀬「片瀬です。斎藤さん一家の知り合いです」

駿、資料を確認。

駿「知り合い、何の知り合いですか？」

片瀬「えつと普通の」

駿「普通の？」

雫「ということは、兄さんは瑠璃さんと結婚しないってことですか？」

啓介「そういうことー」

駿「え、じゃあ会社を継ぐってことー？」

雫「そうですね、そうでなくちゃー」

恵子「慎吾さんはこのこと知っているんですか？」

雫「確かに、兄さんはどこですか？」

片瀬「慎吾さんと言っつのは？」

啓介「言うなれば、瑠璃の昔の男、だよね」

片瀬「昔の。あ、瑠璃さんが昔結婚の約束をしてた人！」

啓介「そうなのかなー」

駿「でも急な展開だなあ」

雫「いやいや兄さんにとってはこれで良かったんですよ」

片瀬「兄さん。あ、じゃあ、この方（雫）が瑠璃さんと昔、結婚の約束をした人の妹さん？」

啓介「そうそうそう」

片瀬「葵さんに手を出されたっていう！」

雫「葵？」

啓介「瑠璃の弟」

雫「あ、そうです！ 私、あの人に手を出されました、こうやって！」

片瀬「あ、物理的に！？」

雫「もうひどいですよね！ びっくりしちゃいました！」

片瀬「なるほど、私、全部理解しました！」

雫「とりあえずお父様に電話してきます！ 兄さんは結婚しないって」

駿「待つて待つて待つて。それはどうだろ」

雫「え？」

駿「瑠璃さんが心変わりしたの、あまりに唐突じゃない？」

雫「いや、広告代理店の女なんてそんなもんですから。取っ替え引っ換えですよ」

駿「だとしても、兄さんはまだ瑠璃さんのことを好きはずでしょ。その気持ちは汲んだ方が良
いんじゃないかなー？」

啓介「でも、瑠璃の気持ちは冷めているわけだから」

駿「まあまあまあ。それはそうかもしれないですけど」

片瀬「私、はつきり聞きました」

駿「聞いちゃったかあ。そうきたかあ」

雫「電話してきますね」

駿「待つて待つて。うん、うんうん。その姉さんの行動力ってすごい良いと思うんだけど、やっぱ兄
さんの想いも尊重しないといけないと思うんだよね。それが兄弟として正しい在り方ってい
うか、ほら、こちらの方（恵子）も言ってたじゃん。家族くらいは常に背中押してあげようって、俺
もそう思うし！ マジで」

雫「どうしたんですか？」

駿「なにが？」

雫「急にペラペラと」

駿「え、そう？ 俺、普段からこれくらい喋るけどお？」

啓介「これ、もし慎吾くんが会社を継がなかったら、誰が継ぐの？」

雫、駿を見る。

啓・雫・片「あゝ」

駿「いやいや違いますから、そういうことじゃないですから」

啓介「あーもう大丈夫です」

雫「こっちはもう全部わかったんで」

駿「わかってないです、その感じはわかってないです」

啓介「瑠璃さんとなら、兄さんは幸せになれると思う」

駿「イジつてくれないでくださいよー」

雫「瑠璃さんとなら兄さんは幸せになれると思う」

駿「姉さんも言うんですか!？」

片瀬「瑠璃さんとなら兄さんは幸せになれると思う」

駿「あなたいなかったでしょ!……そうですよ!……なりたいですよ、社長!……悪いですか!」

片瀬「開き直った」

雫「なんて欲深いのかしら」

啓介「自分のことしか考えてない」

駿「あなただけには言われたくない」

慎吾、下手からやってくる。

慎吾「あれ?」

雫「兄さん!」

啓介「残念だったね、慎吾くん!……どうやらこの勝負、僕の勝ちみたいだ」

駿「大丈夫だよ、兄さん。ここから巻き返そう」

慎吾「なにが?」

片瀬「瑠璃さんから聞いたんです。瑠璃さんに付きまといっている男がいるって!」

慎吾「……え、僕のことですか!？」

片瀬「当たり前じゃないですか!」

慎吾「当たり前。っていうか、どなたですか?」

片瀬「私は、斎藤さん一家の普通の知り合いです!」

慎吾「なんですかその漠然とした繋がリ」

啓介「とにかく慎吾くん、君は瑠璃の昔の男なんだよ!」

雫「大丈夫ですよ、兄さん。あなたに合う人は私が探します」

駿「諦めちゃダメだよ。瑠璃さんと結婚したいんですよ」

慎吾「待つて待つて!……どういつと!……」

啓介「だから、瑠璃は君じゃなくて僕を選んだの!」

慎吾「……ええ!?!……でも、だって……ええ!?!」

啓介「そうだ!」

啓介、上手にはける。

駿「なんか、心当たりとかないの？」「うなっちゃった原因っていつか」

慎吾「いやあ。あ、でも、さつきから何か隠しているような気はするんだよね」

雫「それですよ、ついに本性を現しましたね」

啓介、葵を連れて上手からやってくる。

葵「なんだ」

啓介「瑠璃がね、僕と結婚するんだって」

葵「はあ？！」

片瀬「瑠璃さんから聞きました」

葵「君は？」

片瀬「片瀬です」

葵「ああー！　なんとかなりそうですか？」

片瀬「あ、そうでした！」「うちもすこい気になるけど、確認してきます」

片瀬、上手からはける。

慎吾「あの。本当に瑠璃は僕と結婚しないって言っているんですか？」

啓介「だからそうだって言ってるじゃん」

葵「しかしあまりにも急だろ」

慎・駿「そうなんですよ」

雫「いやいや広告代理店の女はそういうところがあるんですって！　あいつらは人類の敵ですからー」

啓介「過去になにがあつたんすか」

葵「だが瑠璃に限って、というかここも男女の仲なのか！」

恵子「もってなに？　あんたと私は終わってるから」

啓介「結局、こういうやつがストーカーとかになるんだよね」

慎吾「待ってください。そんなことしませんよー！」

美幸、中央左襖を開ける。

美幸「いや、確かに貴様は言っていた。暗闇に身を潜め、獲物を殺す男になると」

慎吾「それはそういう意味で言ったわけじゃ」

美幸「見事だ！」

慎吾「見事だ？」

千代、中央右襖を開ける。

千代「さらにあなたはこう言った。斎藤瑠璃のためなら人類を一掃すると」

啓介「人類を！？」

千代「ブラボー！」

駿「なんでこの人たちは褒めてくるの？」

葵「なんて男だ」

慎吾「ちよ、ちよと待ってください！ あ、瑠璃はどこですか？瑠璃と話をさせてください」

葵、バットを慎吾に向ける。

葵「妙な気は起こすなよ！」

恵子「ちよと！」

葵「ニュースで見たんだ。フラれた腹いせに昔の恋人を殺す人間が増えてるらしい」

慎吾「落ちていてください！」

葵「瑠璃に指一本でも触ってみろ！ ただじゃおかないからな！」

慎吾「何かの間違いです！」

啓介「見苦しいよ、慎吾くん！ 全員の辻褄がここまで見事に合ってるんだ！」

瑠璃、下手から戻ってくる。

瑠璃「え、なにになになに」

啓介「瑠璃、僕の後ろに下がってろ！」

慎吾「瑠璃！」

葵「近づくな！」

啓介「瑠璃ありがとな。俺、お前のこと幸せにすっから！」

瑠璃「はあ？！」

駿「瑠璃さん！……瑠璃さんの婚約者って、誰？」

瑠璃「……慎吾ですけど」

啓介「え？」

慎吾「……よかつたあ」

啓介「え？ え？ じゃあ僕は？」

瑠璃「……幼馴染」

啓介「だけ？」

瑠璃「迷惑な幼馴染」

啓介「いや、そういうことじゃなくて」

瑠璃「迷惑で太っている幼馴染」

啓介「違う違うそういうことでもなくて」

瑠璃「なに？ どういうこと？」

慎吾「なんか、色々な誤解があったみたいで」

瑠璃「っていうか、なんでそんなの持ってるの！？」

葵「これは……なんでもない」

恵子「それで慎吾さん、殴ろうとしてたでしょ」

瑠璃「はあー？」

葵「あれだ。慎吾くんがストーカーで、危ないやつて聞いたから」

瑠璃「いやいや何やってんの！？」

慎吾「僕は大丈夫。なんか、情報が錯綜してたみたいで」

啓介「だから冷静になろうって言ったんだ！」

駿「あんたすごいな」

葵「お前が心配だったんだ」

瑠璃「あのおさ。私が選んだ人だよ？ もうちょっと信頼してくれても良いんじゃない？」

葵「……」

瑠璃「お父さん」

慎吾「……瑠璃」

瑠璃「いや、こっついのはちゃんとっておかないと」

慎吾「じゃなくて、お父さん？ 今、お父さんって言ったよね？」

瑠璃「……弟さん」

葵「うん」

慎吾「……弟さん？」

瑠・葵「うん」

慎吾「いやいや違うでしょ。お父さんって、はっきり智大くんに」

恵子「智大？」

啓介「葵くんでしょ？」

慎吾「葵、あ、人として青いっていう？」

啓介「違う違う。この人の名前」

慎吾「智大くんでは？」

恵子「智大さんはお父さんの方だから」

慎吾「でも、どっちも智大なんですよね？」

啓介「どっちも智大？」

駿「なに、その状況？」

慎吾「……瑠璃？」

瑠璃「いや、えっと」

慎吾「なにか隠してる？」

瑠璃「別にたいしたことじゃないよ」

慎吾「でも、瑠璃の家族に関わることなんですよ？ 確かに僕は世間知らずで頼りないかもしれない。でも、瑠璃が悩んでいることがあるのなら、隠さずに言っただけいい」

瑠璃「……入れ替わってるの」

慎吾「入れ替わってる」

瑠璃「その、魂が」

駿「……方言ですか？」

雫「あー」

瑠璃「じゃなくて。本当に中身っていうか人格っていうか、ちょっと待ってて」

瑠璃、上手からはける。

啓介「わかった！ 瑠璃は別の人格で、慎吾くんとは結婚しないってことだ！」

雫「そういうことですか！」

葵「違う。瑠璃は入れ替わってない。私が、入れ替わってるんだ」

恵子「はあ？」

葵「私は、智大だ」

慎吾「それは、どっちの智大さんですか……？」

葵「瑠璃の父親である斎藤智大だ」

瑠璃、片瀬、上手から戻ってくる。片瀬、魂移転装置も持ってくる。

瑠璃「すいません、お願いします」

片瀬「説明します。これは魂移転装置という機械です。瑠璃さんの叔母である、斎藤千代さんが完成させた発明品となっています。私は、千代さんの助手の片瀬真理恵です」

駿、瑠璃の資料を再び確認。

片瀬「まず、葵さんの魂と智大さんの魂が入れ替わってます。だから、この方を見た目は葵さんなんですけど、中身は父親の智大さん。そして、智大さんの体の中には葵さんの魂が入っています」

瑠璃「で、啓介たちのお母さんの中には、ウチのお母さんの魂が入っている」

啓介「え、そうなの！？」

恵子「確かに変な感じだったけど」

片瀬「ちなみに、お二人のお母様の魂は、あちらの部屋で寝ている瑠璃さんのお母様の体の中に入っています。お会いになってみますか？」

啓介「じゃあ、はい」

片瀬、啓介、恵子、上手からはける。

瑠璃「あと、私の叔母とルンバの魂が入れ替わっていて」

雫「ルンバ!？」

瑠璃「で、妹の美幸と熱帯魚のマイケルの魂が」

駿「熱帯魚」

瑠璃「なかなか信じられないとは思ってますけど」

雫「いや、信じられないですよ。ありえないですよ!」

駿「あ、でも少し前まで、うちが出資している研究所と共同開発してたみたい」

雫「だからなんですか! 魂が入れ替わる? そうやすやすと信じられるわけ——」

慎吾「僕は信じる」

雫「信じはしましょう。ですが瑠璃さん、あなた、兄さんに嘘をついてたってことですよ? お

父様の会社を辞めるとまで言った兄さんに対して!」

慎吾「……お義父さん。正式なご挨拶が遅くなってしまう、申し訳ありません。自分、長島慎吾と申します。瑠璃さんと、結婚を前提にお付き合いしています」

雫「兄さん」

慎吾「瑠璃は本当のことを言ってくれた。僕はそれで十分だと思う」

雫「……もう知りません」

雫、下手からハケようとする。

駿「あ、ちょっと姉さん」

雫「ついてこないでください!」

雫、下手から戻ってくる。

雫「来なさい!」

駿「どっちですか」

駿、下手からハケる。

葵「慎吾くん。お父様の会社を辞めるというのは」

慎吾「父は長島コーポレーションという企業の代表取締役をされていて、僕はその社員です。

今回、海外出張を断ったため、おそらく、父の会社も辞めること」

葵「……さきほど、私たち夫婦が結婚しようとしていた時の話をしたな」

慎吾「はい」

葵「私の父親、つまり瑠璃の祖父にあたるわけだが、彼はある点において私たちの結婚に反対をしていた」

慎吾「それは」

千代、中央右襖を開けて出てくる。

千代「斎藤千代の記憶を検索しました。この時、斎藤ヒトミは既に斎藤瑠璃を身籠っていたようです。ルンバ980です」

美幸、中央右襖から出てくる。

美幸「できちゃった婚というやつだ。妾はそこから聞いていた。マイケルだ」

千代「斎藤瑠璃の祖父はひどく憤った、という情報が斎藤千代の記憶から見つかりました」

美幸「そして祖父は智大にこう言った。俺は認めん。子供は堕ろせと」

千代、美幸、中央右襖からハケる。

葵「私たちは信じていた。二人が愛し合ってさえいれば問題ないと。みんなが祝福してくれるはずだ。だが、現実とは違った。結局、瑠璃の祖父は私を許さず、私たちはこの家から追い出された。再び戻ってこれたのはそれから5年後、瑠璃の祖父が亡くなってからだ。あの人は、自分の意に沿わない人間には冷酷だった。……慎吾くん、老人の戯言だと聞き流してもらってかまわない。だがな、どうしても今の君の姿が、あの頃の私と被ってしまうんだよ」

瑠璃「でも、慎吾の状況は違うよ。だって、ほら言ってたじゃん。慎吾のお父さん、さっき電話で話して、私たちのことを認めてくれそうだって。ね？」

慎吾「……」

瑠璃「慎吾？」

慎吾「ごめん瑠璃、嘘をついてた」

瑠璃「え」

慎吾「お義父さんのおっしゃる通りです。僕の父も、自分の意に沿わない人間には冷酷と言いますか」

葵「反対されたんだな」

慎吾「そんな勝手な真似は許さない。あまり俺を怒らせるなと」

葵「あまり俺を怒らせるな、か。それで？」

慎吾「どうしても結婚するのなら親子の縁を切ると」

葵「……そうか」

慎吾「でも僕は問題ありません、大丈夫なんです！ もともと今の仕事は向いてないと思っていましたし、全然平気です！」

瑠璃「ダメでしょ……。慎吾がお父さんと縁を切るって全然ダメでしょ。え、お父さんは慎吾が出張に行かないのが許せないっていうか引つ掛かっているんだよね？ じゃあ良いよ、1年待つよ、出張に行こ、結婚式は後ろ倒しにすれば良い！」

慎吾「でもそんなことしてたら瑠璃のお義母さんが」

葵「……母さん？」

瑠璃「来年結婚すること」に「だわっていたのは、お母さんのためなの。生きているうちに私の結婚式を見てもらいたくて。だから、ちよつと無理なスケジュールだけど来年式をやれないかつて慎吾には話してて。でも、これは違う。慎吾が自分の家族と関係を悪くしてまでするのは違うよ」

慎吾「瑠璃、大丈夫だから」

瑠璃「だから大丈夫じゃないって」

慎吾「僕は問題ない」

瑠璃「その問題ないっていうのやめてよ！ 慎吾が、慎吾がお父さんと縁を切るかもしれないんですよ。問題あるでしょ」

慎吾「瑠璃。僕は、君のお義母さんと話した。お義母さん言ってた。瑠璃の結婚式をずっと楽しみにしてるって。絶対に瑠璃ちゃんは白のウェディングドレスが似合うって。本当に楽しそうに話してたんだ。僕は、僕も、お義母さんに結婚式を見せたい。……お義父さん。娘さんを僕にください」

葵「……」

フミカ、智大、下手から入ってくる。

フミカ「慎吾さん、お引き取りください」

慎吾「え」

フミカ「確かに瑠璃ちゃんの結婚式を見たいとあなたに言いました。でもね、婚約者の人生を滅茶苦茶にしてまで叶えたいことじゃありません」

慎吾「違うんです、お義母さん」

フミカ「あなたにお義母さんと呼ばれる筋合いはありません」

慎吾「……違うんです。僕は、僕の人生は決して滅茶苦茶になんかなくてません。む、むしろ自由になったんです。ずっと顔を窺っていた父から自由に！」

フミカ「自由」

慎吾「はい」

フミカ「それは逃げているだけじゃないの？ お父様から。今の状態であなたたちの結婚を認めるわけにはいきません。どうぞ、お引き取りください」

慎吾「……」

智大のアップルウォッチが鳴る。

恵子、片瀬、上手からやってくる。

恵子「あの、お母さんが、お母さんがすごい苦しそっで！」

智大、上手からハケる。

片瀬「咳が止まらなくて、呼吸が激しくなっただんです。もしかしたら魂が移転したことが体の負担になっているのかもしれない」

葵「そんなことがあるんですか」

片瀬「本来結びついていたはずの肉体と魂を強制的に分離させただんです。可能性としては十分に考えられます」

葵「とりあえず救急車を！」

恵子「あ、はい」

片瀬「お待ちください。瑠璃さんたちには説明したのですが、魂の移転はこの家でないと行えません。千代さんが改造したアンテナの適用範囲がこの家の敷地内なんです！」

瑠璃以外、ピンときていない。

片瀬「とにかく、お母様の体が病院に運ばれてしまえば、お母様とお隣さんの魂を戻せなくなります。もしお母様の体が入院してしまったら、万が一それ以上のことが起きたら……」

フミカ「どうなるんですか？ もし、もし私の体死んだらその中に入ってるお隣さんの魂は」
片瀬「分かりません、全く想像がつかない！ 体の活動が止まっても魂はその中に留まり続けるのか、それとも体と共に魂も消えてしまうのか」

フミカ「ダメよ、それだけは絶対にダメ！ 死ぬなら私じゃなきゃ！」

葵「ヒトミ」

フミカ「お願いします、私の魂を元に戻してください！」

葵「だが戻ったら！」

フミカ「なに？」

葵「……いや。片瀬さんお願いします！」

片瀬「分かりました、ではお母様以外はこちらのヘルメットを被ってください」
恵子「ヘルメット？」

片瀬「はい。これを被れば魂の移転を防ぐことができます！」

恵子「え、ほんとにこれで防げるんですか？」

片瀬「どうしても不安な方は家の外へ！　すぐに準備します！」

智大、戻ってくる。

智大「け、啓介くんが病院に連れてった！」

葵「は？」

智大「母さんの体！　救急車待つてられないからって啓介くん、裏口から運んで！」

恵子「でもお兄ちゃん、バイクの免許しか」

バイクの音。

葵、庭からハケる。

葵、庭から戻ってくる。

瑠璃「恵ちゃん、電話して！」

恵子「あ、うん！」

恵子、兄に電話を掛ける。

片瀬「っていうかバイクでどうやってお母様、連れて行っただんですか！？」

智大「なんかロープで自分と母さんの体を結んで」

フミカ「二人乗りみたいな感じで行っただって事？」

智大「そう！」

葵「むちゃくちゃだ」

恵子「お兄ちゃん、出ないです」

フミカ「とにかく私たちも追いかけてしまえ！」

葵「そうだな、たぶん市民病院だろう！」

智大「俺運転する」

恵子「待つて。ウチがいつも行っているのは隣の総合病院なんです。もしかしたらそっちに向かっているのかも」

フミカ「じゃあそっちにいきましょう！」

葵「だが市民病院に行っている可能性もOじゃないだろ。もしそっちに向かったら」

瑠璃「とりあえず総合病院には向かう！」

恵子「私いく！」

瑠璃「じゃあ、葵と恵ちゃん！　お願い！」

智大「え、あ、わかった」

智大、恵子、ハケながら

恵子「つていうか本当に葵なの！？」

智大「そうだよ！」

片瀬「市民病院の方はどうします？」

フミカ「じゃあそちはお父さんの車で向かいましょっ」

葵「いや、今車検に出してんだよ」

瑠璃「車検」

片瀬「誰か車を貸してくれそうな人はいないんですか？」

フミカ「3軒隣の吉井さんは！」

葵「今、長男が使ってるはずだ。新婚旅行に行ってる！」

瑠璃「え、再婚したの！？」

片瀬「だったらもうタクシー呼ぶとか！」

葵「あ、確かに。それでいきましょっ！」

フミカ「すぐに来てくれると良いけど」

慎吾、駿から電話がかかってくる。

駿、舞台上に登場して慎吾と電話。手に車のキーを持っている。

駿「もしもーし、結局そっちはどうなった？」

慎吾「駿。……ちよっとお願いしたいことがあるんだけど」

駿「え？」

恵子と智大、舞台上に登場。智大が運転席、恵子が助手席。

恵子「ねえこれ、あんたのお母さんの体に何かあったらどうなるの？」

智大「わからない」

恵子「もしもの場合もしものことが起きちゃったりするの？」

智大「わからない」

恵子「本当に大丈夫なんだよね？」

智大「わからない」

恵子「なんで何にもわかんないの!」

智大「そんなこと言われ——」

恵子「ちよつと今、赤信号じゃなかった!？」

智大「良いでしょそれくらい!」

恵子「……ごめん」

智大、恵子の手を握る。

智大「大丈夫だから」

恵子「……はあ!？」

恵子と智大、ハケる。

雫と駿、スマホをスピーカーにして慎吾から共有を受けた後。

駿「なるほど。つまり俺たちに、その市民病院の方に向かって欲しいと。どうする、姉さん?」

雫「行くわけじゃないじゃないですか。私はもう兄さんのことなんて知りません」

駿「そうだねー。ぶっちゃけ俺たちとはいつさい関係ない話だし」

雫「ええ、そうです」

駿「わざわざ協力する義理もない」

雫「はい」

駿「俺たちはもう赤の他人だ」

雫「なんでそんな酷いこと言うんですか!」

駿「今から向かいまーす」

雫、駿、ハケる。

恵子、智大、上手から登場。(車を駐車させて病院に向かっている)

恵子「ちよつと早くしてよ!」

智大「待ってよ。この体、全然言っこといなくて。あ、腰が痛い」

智大、息切れしている。

恵子「もう!」

恵子、智大の手をつかんで下手からハケる。

美幸、千代が舞台上にいる。

慎吾、雫と電話をしている。

慎吾「市民病院にはいなかった。ありがとう雫」

美幸、魚達の声聞いている。

美幸「聞こえたぞ。我が同族の住む川辺近くに貴様らが探している男がいる」

慎吾「雫、ちょっと待ってて！」

美幸「母親を背負い、バイクの前で立ち尽くしているようだ」

葵「立ち尽くしている？」

瑠璃「どういう状況？」

美幸「……パンクだ」

葵「なにやってんだ、あいつは！」

慎吾「場所を教えてもらっても良いですか、妹達を向かわせます！」

美幸「タイリクバラタナゴ」の棲家を検索した」

慎吾「えっとそれは一体」

瑠璃「大体の住所とか」

美幸「住所というのは貴様らが勝手に決めた記号でしかない。海をよこし、自然を汚染し、他の

動植物を蹂躪してきた猿共よ！」

葵「わかったわかったわかったわかった」

千代「タイリクバラタナゴ」の棲家を検索しました。東浦市3丁目5番地を北から南へと流れる河

流であると推察されます」

フミカ「それ、ここからすぐじゃない！」

葵「出発して早々にパンクしたってことか」

慎吾「もしも雫」

瑠璃「待つて慎吾。そこなら多分、恵ちゃん達の方が近い」

恵子、庭から出てくる。

フミカ、下手からハケる。

恵子「はいはいあの辺ね。うん、わかる。大丈夫、すぐに向かえると思う！」

智大、息を切らしながら出てくる。

智大「なに？ 見つかったの？」

恵子「うん。ほら、いくよ」

智大「え、また戻るのお？」

恵子、智大、庭上手からハケる。

瑠璃「あれ、お母さんは!？」

美幸「先ほど出て行ったぞ」

千代「河川へ向かったと思われます」

葵「追いかけてくる!」

葵、下手からハケる。

片瀬「瑠璃さん」

瑠璃「あ、はい」

片瀬「お母様の体とお隣さんの体が揃ったらすぐに移転を開始します。ほとんど話す時間は取れないかと。よろしいですか？」

瑠璃「お願いします」

片瀬「わかりました。ひとまず設定は完了したので、動作確認だけしちやいますね」
瑠璃「動作確認？」

片瀬、レバーを引く。

瑠璃、倒れる。

慎吾「瑠璃!」

片瀬「あれ、え、あ!」

葵、フミカ、庭から戻ってくる。

フミカ「そうね、私が行って入れ違いになったら元の子も、瑠璃ちゃん!？」

片瀬「すいません、てっきりヘルメットを被っているものだと思ってレバーを!」

千代「斉藤千代と同じ展開でした」

美幸「成長しない種族だ」

葵「だが、誰と入れ替わっているんだ？」

片瀬「他の場所見えます」

片瀬、上手からハケる。

瑠璃、起きる。

フミカ「瑠璃ちゃん？」

瑠璃「……お母さん」

フミカ「良かった、瑠璃ちゃんなのね」

慎吾「大丈夫、瑠璃？」

瑠璃、慎吾の手をとって起き上がる。

慎吾、瑠璃の手に違和感を抱いて手を離す。

瑠璃「どうしたの、慎吾？」

慎吾「……あなた、誰ですか？」

瑠璃「……へえ」

千代「生体反応に異常あり」

美幸「貴様、この世のものじゃないな？」

葵「誰だ」

瑠璃「誰だとはひどいじゃないか、智大」

葵「……親父？」

慎吾「瑠璃の、お祖父さん？」

瑠璃「いかにも」

葵「なんで」

瑠璃「ずっといたんだよ、魂の状態でこの家に。他の奴らは知らんが、俺という人間の魂は随分としぶといらしい」

葵「……片瀬さんと呼んでくる」

瑠璃「おいおい。せっかく父親と会えたんだ、もう少し話していけよ」

葵「見ていたならわかるだろ、今はそんな場合じゃないんだ」

瑠璃「良いから待て。提案がある」

葵「提案？」

瑠璃「俺たち、この体のまま生きていかないか？」

葵「は？」

瑠璃「この機械を壊して、このまま生活していくんだよ。どうだ、良いだろ」

フミカ「冗談はやめてください」

瑠璃「冗談なんかじゃない。あんただって実感しているはずだ。自由に動く体がどれだけ素晴らしいものなのか。それに、よく見てみる。その婚約者を除けば、ここに居るのは、今の体の方が都合の良い奴らばかりだ」

葵「その体は瑠璃のものだ」

瑠璃「だから？」

葵「瑠璃はあんたの孫だろ！」

瑠璃「俺が認めていない孫だ。なあ、智大。良いだろ、このままいこうじゃないか」
葵「馬鹿馬鹿しい」

千代と美幸、葵とフミカを制圧する。

美幸「悪いな。確かに此奴の言う通りだ」

千代「提案に乗る方が合理的だと判断しました」

瑠璃、バットで慎吾の腹を殴る。慎吾、縁側から落ちる。

瑠璃「出て行け。で、この家のことはさっぱり忘れろ」

慎吾、出ていかない。

瑠璃「良いか、お坊ちゃん。世の中には、俺みたいに厄介な人間がいるんだよ。こういう人間とは関わらないほうが良い。なあ？　あまり、俺を怒らせるな」

慎吾「……いいやです」

瑠璃「なに？」

慎吾「出ていきません。僕は、斉藤瑠璃さんと結婚するためにここに来ました。あ、あなたの言いなりにはなりません」

瑠璃「……あ、そう」

啓介、下手からバイクのヘルメットを持って入ってくる。

啓介「戻りました！」

慎吾、瑠璃の腕を掴んでバットを奪い取ろうとする。

啓介「うおおおお！」

慎吾「啓介さん、手伝って！」

啓介「なにになにという状況！」

瑠璃「（瑠璃の真似をして）啓介、助けて！」

啓介「僕の瑠璃に何するんだ！」

啓介、慎吾を突き飛ばす。

啓介「大丈夫、瑠璃？」

瑠璃「よくやった」

瑠璃、バットを掲げる。

瑠璃「死ね」

瑠璃、慎吾にバットを振り下ろそうとする。

葵・フ「瑠璃！」

瑠璃、慎吾にバットを振り下ろす直前に体が硬直。

瑠璃、瑠璃の魂を取り払うようにバットを振り回す。

瑠璃「邪魔するな瑠璃！」

片瀬、上手からやってくる。

片瀬「どういう状況ですか！」

瑠璃、魂移転装置をバットで殴ろうとする。

片瀬「ちよつと瑠璃さん！」

瑠璃、魂移転装置をバットで殴る。

魂移転装置が壊れたような音が鳴り始める。

瑠璃「ふふふ、ははははは！」

瑠璃から祖父の魂が抜けて瑠璃が倒れる。

片瀬「な、なにがあつたんですか一体！」

魂移転装置、再び壊れたような音が鳴り始める。

片瀬「移転装置が暴走しています。みなさん、ヘルメットを」

一同、ヘルメットを被る。

慎吾、瑠璃にヘルメットを被せてあげる。

葵「慎吾くんのヘルメットはー!」

慎吾から魂が抜け始める。

フミカ、慎吾の頭を守るようにして慎吾を抱き締める。

暗転

明転

葵「……慎吾くん?」

片瀬「気を失って、ない……!」

慎吾、気を失っていない。

フミカ「大丈夫?」

慎吾「お母さん? あ、すみません。……瑠璃」

慎吾、瑠璃を介抱。

葵「眠っているだけみたいだな」

片瀬「あの、結局私がない間に何が……?」

葵「ああ、なんと言いますか」

千代「ご安心ください。現在、斎藤瑠璃及びその周辺に異常な生体反応は検出されていません」
美幸「全く、とんでもないやつだったな」

葵「お前ら」

フミカ「(立ち上がったから)慎吾さん。……さっき、なんで瑠璃ちゃんじゃないってわかったの?」

慎吾「それは、手を握ったらそんな気がしたと言いますか」

フミカ「そつ。……良いわよ。お義母さんで」

慎吾「え」

フミカ「ただし条件があります。来年式を挙げるのなら、あなたのお父様にもちゃんと認めてもらいなさい。……大丈夫。あなたならきつと立ち向かえる」

慎吾「……はい」

フミカ「娘を、よろしくお願いします」

啓介、慎吾の肩を叩く。

啓介「……許す」

葵「なにがだ！　っていうかお前、慎吾くんのこと突き飛ばしてたら、謝れよ！」

恵子、下手から戻ってくる。

恵子「あの、お母さんどうすれば。とりあえず車で寝かせているんですけど」

葵「片瀬さん」

片瀬「これは……」

智大、下手からやってくる。

智大「ねえねえ！　……なんか、叔母さんの昔からの知り合いっていう人が」

暗転

明転

舞台上には瑠璃とフミカがいる。

瑠璃「で、その時やってきたのが、坂野江研究所っていうところの人で」

フミカ「坂野江研究所」

瑠璃「はい。なんか、叔母さんと昔、魂移転装置の共同開発をしたみたいなんです。助手の片瀬さんがダメ元で連絡してたらしくて」

フミカ「じゃあ、その研究所の人が移転装置を？」

瑠璃「けっこうテキパキと直してくれたみたいです。まあ私はその時、気を失っていたんで詳しいことはわからないんですけど。……魂移転装置を直してもらって、フミカさんとお母さんの魂を戻して、で、お母さんを病院に連れて行ったっていう。私が目覚めたのはその後で、目覚めた時にはもう、他のみんなの魂も元に戻っていました」

フミカ「バタバタだったんですね」

瑠璃「迷惑おかけしました」

フミカ「いえいえ。あ、じゃあその、魂移転装置は？」

瑠璃「色々話し合って、ひとまず坂野江研究所で管理することになったみたいです」
フミカ「そつ」

智大、上手からやってくる。喪服になっている。

智大「あ、どうも」

フミカ「こんにちは」

智大「瑠璃。そろそろ着替えなさい」

瑠璃「ああ、うん。じゃあ、私たちこれから」

フミカ「ああ、そうね」

瑠璃、上手からハケようとする。

フミカ「残念でしたね、お母さん」

瑠璃「……1週間頑張ってくれたんですねー。最後まで意識は戻らなくて」

フミカ「やっぱり、入れ替わったことが？」

瑠璃「もともと危ない状態とは言われてたんです。千代叔母さんは自分のせいだって落ち込んでましたけど、でも、今回のことがなかったらお母さんとあそこまで話せることもなかったわけですし……」
「めんなさい、ちよつとまだ色々整理がついてなくて」

フミカ「結婚式は、どうするの？」

瑠璃「……やりますよ。お母さん、娘をよろしくお願いしますって慎吾に言ってたみたいですし、

慎吾も、絶対に自分のお父さんを説得するって言うてくれるので」

フミカ「そつ」

瑠璃「でも……やっぱり見てもらいたかったなあ」

フミカ「見てるわよ」

瑠璃「ー」

フミカ「……って、お母さんなら言うんじゃない？」

瑠璃「……あ、ああ！ そうかもしれないね」

フミカ「じゃあ」

瑠璃「あ、はい」

フミカ、庭からハケる。

瑠璃「見ててくれるのかな」

額縁が傾く。

瑠璃「！」

BGM ㄣ。

暗転。

(完)